

30年間、使い続ける

—新潟市美術館の建築とその歴史—

星野 立子

はじめに

新潟市美術館は、1985（昭和60）年10月13日に開館し、本年で30周年を迎えた。建物を設計したのは、新潟市に生まれ、20世紀の日本の建築界を牽引した前川國男（1905—1986）である。この節目にあわせ、当館では2014（平成26）年8月から施設の大規模改修工事を実施し、同年10月から約9ヶ月間の休館期間を経て、翌2015（平成27）年7月19日にリニューアルオープンした。職員がこの間従事した一連の準備作業は、細かなところでは、使用する接着剤一つに気を遣ったり、山のような内装材のサンプル帳の中から候補を絞り込んでいくことに始まり、ひいては館の運営全般に関わる事業方針を検討するなど、検討と判断の連続であった。省察と取捨選択とを重ねる中で主な指針としていたのは、美術館を取り巻く様々な時代の新しい要請に応えながらも、これまで培ってきた経験や既に身近に存在している物事を改めて見つめ直し、そのうち育んでいくに値すると見なしたものについては、一層の磨きをかけることであった。これは、2012（平成24）年に策定した館の第一の運営方針である「あるもの（館蔵品を含む地域の多様な文化資源・自然環境）を活かし、あらたな知を掘り起こす、『発見する美術館』」に呼応している〔註1〕。美術館の建築そのものについても、このような観点から、いま一度向き合う機会となった。

本稿は、30周年の大規模改修から時間が経ち過ぎないうちに、新潟市美術館の建築について検討することを目的としている。今回のリニューアルは、概括して二つの方向からのアプローチを試みており、本稿はこれをそのまま構成の順としている。第一に、前川國男設計の建築であるという事実にあらかじめ焦点を当て、建設当初に込められた設計の意図と、それがいかに建築に表出していたかを読み直すこと。第二に、竣工時点を建築のオリジナルな状態として絶対視するのではなく、その後の30年間に、一部を補ったり、直したり、作り変えたりしてきた行為それ自体に意味を見出し、その道筋を辿りなおすこと。本改修工事は、これらのいずれについても、現在の視点から再評価する経験になった。平たく言ってしまうと、新潟市美術館の建築について、開館30年目に考えたことの覚え書きであるが、住人である美術館の一職員が語り手であるということ、30余年の長いスパンを対象として論じていることが、特徴と言えるかもしれない。

1970年代後半～1985年：設計競技から建設まで

新潟市美術館の建設構想が立ち上がるより早く、1960年代から、新潟市および周辺地域においては複数の美術館が先行して活動を始めていた〔註2〕。地方公共団体としての新潟市にも公立の美術館を、という声が高まったのは、全国で美術館をはじめとする公立文化施設の建設が相次いでいた1970年代後半である。その主な担い手となったのは、新潟市民の公募美術展「新潟市美術展」を運営する新潟市美術協会である。従来、市内の作家や美術愛好家は百貨店や新潟県民会館を会場として作品の発表を行っていた。同展が開催10年目を迎えるに当たって、あらためて作品の制作や発表を行える公的な場の建設を求める運動を行い、美術館建設期成同盟会を発足させた。1978（昭和53）年には、当時の新潟市長に対する陳情が提出された。1980（昭和55）年から着手され82（昭和57）年に策定が完了した基本計画では、「市民が期待する創作活動等が行える美術館は乏しく、市民の要望に応えられない現状」への懸念や、「市民が気軽に美術活動を行うことができる（創る美術館）」の創設が謳われているが〔註3〕、ここには当時の市民の側の要望が反映されている。

一方、時を同じくして、新潟市役所の内部においても市立の美術館を建設する機運が高まり、計画が始動する。建設計画が持ち上がった1978（昭和53）年の段階で、新潟市教育委員会が管轄していた社会教育施設中、博物館法に関わる施設には新潟市郷土資料館（1972年開館、現新潟市歴史博物館）と新潟市水族館（1967年開館）があった〔註4〕。同年3月には、建設候補地として、新潟刑務所移転後の跡地を利用する方針が具体化し始めた。新潟市が美術館建設に関心を寄せるようになった背景には、1980年代、全国各地で美術館建設がブームの様相を呈していたことがある。たとえば1970（昭和45）年から当館が竣工するまで、15年間の設置状況を見てみると全国で66件を数え（表1）、当館も同じ社会現象下に建てられた施設の一つである。先に紹介した基本計画の中でも、全国の公立および私立美術館の設置数を引き合いに出しているし〔註5〕、同時に、先に市内で活動を開始していた「県立美術館と有機的に連携をとりながら、その機能を分担、補完しあい造形美術の鑑賞、創作、発表の場としての機能が発

註1 このほか、「教育普及の事業を通じて、あらゆる世代の市民が『学べる美術館』」、「さまざまな芸術が交差し、訪れるたびに心躍る『生きている美術館』」、「市民同士、地域の文化施設相互が『つながる美術館』」、「高い質を保ち、市民が誇れる『信賴の美術館』」の4つの方針が続く。

註2 たとえば新潟市内では、B S N新潟美術館（1964年開館、1985年閉館）、新潟県美術博物館（1967年開館、1993年閉館。現新潟県立近代美術館の前身）、敦井美術館（1983年開館）など。なお、長岡市には、国内で最初に「現代美術」を館名に掲げた長岡現代美術館（1964年開館、1979年閉館）があった。当館はB S N新潟美術館の旧コレクションのうち122点を寄託品として引き継ぎ、保管・公開している。

註3 新潟市建設局建設部営繕課、新潟市教育委員会社会教育課編『新潟市美術館設計競技記録集』新潟市、1983年、6頁

註4 「昭和59年度 新潟市の社会教育」新潟市教育委員会、1984年

註5 昭和56年度の時点で「公立97館、私立256館」としている。（『新潟市美術館設計競技記録集』6頁）

註6 「新潟市美術館設計競技記録集」6頁

註7 「わが建築青春記」、『建築雑誌』第99号、日本建築学会、1984年3月、12頁

註8 1949～1982年在籍。当館の設計コンペ参加の時点で千葉県立美術館（1976年竣工）、群馬県立歴史博物館（1980年竣工）などの公立の美術館・博物館を竣工させており、他にも、神奈川県立近代美術館鎌倉別館や福島県立美術館（ともに1984年竣工）を設計している。

註9 建築家川崎清（1932-、新潟県三条市出身）率いる環境・建築研究所は、栃木県立美術館（1972年竣工）、安井建築設計事務所は各地の公共・民間建築を、当館建設計画時点で設計した実績を有していた。新潟県の建築設計協同組合の参加は、実際の設計というよりはコンペ参加により研鑽を積むために指名を受けたことによる。

註10 「新潟市美術館設計競技記録集」83頁

註11 「新潟市美術館設計競技記録集」82頁



図3 感謝状贈呈写真
(新潟市美術館開館記念式典、1985年10月12日)

揮できるよう努める」と表明している点に〔註6〕、他の自治体に遅れを取るまいとする意識や近隣の類似施設との棲み分けを図ろうとする姿勢が伺える。新潟市美術館は、このような行政の意向と、市民の運動との接点に建設されることになったのであった。

1982（昭和57）年3月に基本計画が発表されると、同月中には建築設計競技（コンペ）の歴史に詳しい専門家へのヒアリングが行われ、結果、4月には、指名設計競技方式によって設計者を選定することに決まった。審査員として、新潟市からは教育長、建設局長、企画部長の3名（いずれも当時）、また、外部有識者として芦原義信（1918-2003）、近江榮（1925-2005）、池原義郎（1928-）、本田久雄（1905-1999）の4名の建築家が選ばれた。芦原以下3名は、当時全国規模で活躍していた建築家である。一方の本田は1926（昭和元）年新潟市に建築技師として就職し、市内の公共建築を数多く手がけた人物である。自身でも設計事務所を構え〔註7〕、当時、日本建築学会北陸支部新潟支所長でもあったことから、地元の建築界の代表として選ばれている。

並行して、コンペの参加を呼びかける設計事務所の選定も進められる。前川國男建築設計事務所のほか、5社が指名された。五十音順に、大高建築設計事務所、株式会社環境・建築研究所、佐藤武夫設計事務所、新潟県建築設計協同組合、安井建築設計事務所である。うち、大高建築設計事務所の大高正人（1923-2010）は前川の設計事務所内に在籍していたOBでもある〔註8〕。佐藤武夫設計事務所は、市内の新潟県人会館（1967年開館）を設計した実績を持っていた〔註9〕。

同年6月、指名6社に対して正式な依頼がなされた。3ヶ月の制作期間と審査の結果、前川國男建築設計事務所案（文末資料）が選ばれ、正式に設計委託の契約が取り交わされた。当時の講評では、次のようにある。

この案は地階を避けて2階建案とし、有効な土地利用が意図されており、各展示室にそれぞれ異なる外部空間（山の庭と海の庭）が巧みに組み込まれている。プランニングは明快なゾーニングを果たしながら凡庸に陥らず豊かな視角体験の変化が演出されている。応募案6点の中では、特に展示部門スペースが最大であり、狭隘な県立美術館の企画を補ない超えられる規模となっている。外観は、建物各部のマッサ（量塊）がほどよく組合わされ、まとまった造形となっており、また広々としたアプローチによって車寄せは、バスも転回可能なスペースが確保されている。

公園との一体化は、柳と堀割の軸線が美術館内の海の庭へと関連づけられている。あえて問題点を挙げれば、収蔵庫の位置は外気から隔絶されて理想的だが、増築予定を先行させているこの提案の可否と、2階の実習室と講堂の来館者用便所への動線が館長室の前を通る難点がある。しかし一階の画材店と館長室を入替えることで容易に解決するだろう。〔註10〕

審査の決め手となったのは、当時の総評によれば、既に一部建設が進められていた美術館向かいの公園と一体的な空間として設計できているかどうか、また、「市民に開かれた美術館」という期待される館の性格を説得力を持って提案できているかどうかであった。職員の執務室や講堂・実習室など展示室以外の付随的な居室については各案で違いが大きく、管理事務室についてのみ、1階に配置されているかを確認事項として選定が行われた〔註11〕。また、ここでも既存の県立美術館（正式には、新潟県美術博物館）と応募案とを包み隠さず比較する点に、当時の新潟市の力の傾けようが率直に表れていると言えよう。

その後、1983（昭和58）年春には基本実施設計が出来上がり、7月に着工した。1984（昭和59）年末には本体工事が、1985年（昭和60）年3月には外構工事までが竣工し、3月25日には全ての工程が完了するところとなった。

一般公開を翌日に控えた10月12日には、関係者を招き、美術館講堂において開館記念式典が執り行われた。当館に残されている当時の記録写真には、感謝状を受け取る晩年の前川の姿が写っている（図3）。このあと述べるような幼少期を過ごした地で、約80年の時を隔てて自らの建築が美術館として船出したこの日、前川は果たしてどのような胸の内であったのだろうか。

前川國男と新潟

今日、日本のモダニズム建築の歴史を語る上で欠かすことのできない建築家として広く知ら

れる前川國男であるが、彼の出生地が新潟市であることは、ここ新潟市を含めてそれほど知られてはいない。建築家としてのキャリアにおいて数多くの建築物を実現させた前川が新潟県内で手掛けたのは、紀伊國屋書店新潟店（1975年竣工、現存せず）〔註12〕、長岡ロングライフセンター（1980年竣工）、長岡市北部体育館（1984年竣工）と併せ、計4件〔註13〕。うち、新潟市美術館は最後の設計になり、また、1986（昭和61）年に世界する前川の全生涯の中でも最晩年の作品の一つに位置付けられる。

20世紀のほぼ最初から終わりまでを生き抜いた前川が生まれたのは、1905（明治38）年5月14日。新潟市では、父親の転勤に伴い1909（明治42）年5月に家族揃って東京へ引っ越すまで、人生の最初の4年間を過ごした。一家が暮らしていたのは、新潟市学校町通2番町（現中央区）である。父貫一（1873-1955）は、東京帝国大学工科大学土木工学科（現東京大学工学部）を卒業し、内務省土木局に勤務した技術官僚であった。初め、現在の大阪にあった第五区監督署に配属され淀川の河川工事を担当した後、1898（明治31）年、新潟地域を管轄する第三区監督署に異動となった。幼き國男を伴って東京に転勤することになるまでの約10年間に従事したのが、信濃川の改修に先立つ調査と、域内の府県の土木工事の監督であった〔註14〕。在任中の仕事は、その後、信濃川下流域の水害対策と土地改良を進展させた大河津分水の整備に結実していくことになる〔註15〕。前川の母となる田中菊枝（1885-1975）と出会ったのもこの頃で、1904（明治37）年6月、2人は結婚した。菊枝は、旧津軽藩士の家に生まれた田中坤六を父に持つ。父が新潟県書記官に在任中、新潟県立高等女学校（現新潟中央高等学校）を第一期生として卒業し、貫一のもとに嫁ぐこととなった〔註16〕。

生涯のうちの、ごく早く、また短い新潟時代について触れられている資料は決して多くはない。その中で『一建築家の信條』〔註17〕では、前川自身の言葉で当時の記憶が語られており、当時の前川を紹介するテキストとして、その後他所で参照される基礎的なエピソードを提供する。やや長いが、前川の発言を抜き出した編者の問いかけ（冒頭をーで示した）とともに引用する。

ー建築家としての前川さんを考えるときに、やはり幼いころの環境は無視できないように思うんですが、まず、いわゆる原風景としての新潟について伺いたいですね。

冬の印象が強いよね。五つまで新潟に居ただけけど〔註18〕、吹雪の夜なんか、全部雨戸を閉めてあるんだけど、明りとりのために上のほうが障子になってる、その障子にね、パラパラと雪のぶつかる音がとても印象的だった。親父が土木でしよう、しょっちゅう出張するんだね。その留守のときなんか、雪の音を聞いてると、なんとなく物悲しくってね。

ーそのお住まいは官舎でしたか？

いや、借家です。ふつうの木造の。

ー雨戸の明りとりの障子っていうのは……

そう、雨戸の上のところがね、障子貼りになってて。あの辺の家はみんなそうだったんだらうけど、昼間でも雨戸をたてることが多いから。

ー前に、信濃川の堤へ、よく女中さんにおんぶされて行かれたって伺いましたが、おうちには川に近かったんですね。

そう、よく川蒸気を見に行っただよ。親父の事務所とも近かったから、出迎えに行ったりね。それと、冬の印象では番太郎がね、火の用心の拍子木をならしながら、外を歩いてゆくのをよく聞いたもんだよ。ぼくはね、番太郎ってのはどんな顔してるのか、見たくてしょうがなくってね。というのは、桃太郎のイメージと重なってたからなんだね。

註12 1975（昭和50）年6月に開店していた万代シルバーホテルビル内2階に翌7月開店した店舗。前川は、1947（昭和22）年の紀伊國屋書店新宿本店以降、全国の店舗の設計に内装工事を中心として関わっていた。新潟店もその一つ。（前川國男「建築とインテリアを担当して四半世紀」、『株式会社紀伊國屋書店創業五十年記念誌』紀伊國屋書店、1977年、38-41頁）

註13 「作品分布図」、『生誕100年・前川國男建築展』生誕100年・前川國男建築展実行委員会、2005年、284頁

註14 前川貫一「川の人物誌（4）前川貫一—私の河川道中記」、にほんのかかわ編集委員会編『にほんのかわ』第94号、日本河川開発調査会、2001年8月（初出：前川貫一ほか『河川工事の創始当時を語る（座談会）』日本河川協会、1950年）

註15 松沢寿重「土木家・前川貫一と建築家・前川國男 父から子へ受け継がれた志」、五百川清編『大河津分水双書資料編 第七巻 大河津分水と信濃川下流域の土地改良』社団法人北陸建設弘済会、2007年5月、56-60頁

註16 養子に出された母の兄に佐藤尚武（1882-1971）がいる。国際連盟の日本事務局長としてパリに在任していたこの伯父の協力を得て、前川は建築家ル・コルビュジエ（1887-1965）を訪ね渡仏することになる。

註17 前川國男、宮内嘉久「一建築家の信條」晶文社、1981年。編集者で建築ジャーナリストであった宮内嘉久（1926-2009）が、1970年代後半に前川本人にインタビューを行いその業績について著した。

註18 【引用者註】数え年。満年齢では4歳まで新潟にいたことになる。

—でも、よく覚えておられますね。

親父がね、夜、うちに居ると、よく炬燵の中で、あぐらにぼくを腰掛けさせて、本を読んでくれたり、絵を描いてくれたんだね。汽車の絵とか、家の絵とか。「お前は大きくなったら、うちを建てる人にならないかなあ」って、まあ冗談半分に言ってたんだね。それがいつの間にか、そうなるのが当たり前のような気がしちゃって。

—そうですか、そんなに早くに。

親父の暗示にかかったようなもんだね、言ってみれば。

—新潟に居られた時分、まわりの友達とかは……

隣りに千田さんという家があって、そこへしょっちゅう遊びに行ってたのを覚えてるね、弁当持って。初江〔註19〕さんという女の児が居たんだよ。

—仲良しだったわけですね。ほかの地元の子とは……

そうね、あんまり接触がなかったね。ただ、ねえやのひとは土地の子で、まだ十二、三じゃなかったかな。よく遊んでもらったけど、小さかったんだよね、考えてみれば。……

—雪とか、信濃川とか、新潟の風物についての記憶を伺いましたけど、ほかに覚えていらっしゃることは何か……

よく火事があった。夜ね、だっこされて見に行くとね、こう火の粉が舞ってるだろ。こわくてね、膝がガクガクしたことを覚えてるよ。

—冬のフェーン現象で、多かつたんでしょうね、火事は。

そうね。朝になって、親父を送りに出ると、焼けだされた人たちが、うちの下の道路脇にうずくまってる光景なんか、よく覚えてるよ。

—そうですか。そのころは、まだ弟さんはいらっしやなくて……

いや、いまの弟（春雄）〔註20〕は東京に来てから生れたんだが、すぐ下のが赤ん坊で〔註21〕……、先年病気で死んだんだけど。（図4）

—よくお父さん児とかお母さん児とか言いますでしょう？いままで前川さんからいろいろお話を伺ってきた印象では、前川さんはどちらかといえばお父さん児ではないかなって思うんですが……

そうね。当たってるだろうね。新潟ではイタリア軒も印象に残ってるよ。いまもあるそうだけど、イタリア人の経営していた西洋料理屋で、こう羽目板を張った洋館で、玄関の上にバルコニーがあってね（図5）〔註22〕。そこへ主人が出て来て話してたのを覚えてるよ。

—ご家族で時々いらしたわけですね。

何しに行ったか、覚えてないんだけど。

註19 【引用者註】 同書巻末の年表中では、「初枝」の表記となっている。

註20 【引用者註】 前川春雄（1911-1989）。前川家の三男。一家が東京に居を移して後に生まれた。1935（昭和10）年に東京帝国大学法学部を卒業、日本銀行に入行。1979（昭和54）年より同総裁に就任し、第二次オイルショック後の経済再建に尽力した。1985（昭和60）年からは経済構造調整研究会の座長を務め、在任中に「前川レポート」と呼ばれる日本経済への提言をまとめた報告書を発表した。

註21 【引用者註】 前川信夫（1908-1980）前川家の次男。一家が新潟在住中に生まれた。



図4 【挿入引用者】
前川一家（1911年4月23日、東京・本郷で撮影）
（後列左より父・貫一、母・菊枝、二男・信夫、國男、三男・春雄）
（資料提供：前川建築設計事務所）

—何しにって、みなさんでお食事にゆかれたわけでしょう？

あんまりご馳走をたべた記憶はないんだけど。

—いまのお話もそうでしたが、洋館なら洋館、あるいはこたつの中で明り障子に当る雪の音をきく光景とか、前川さんの記憶を伺っていると、ひじょうに映像が明確というか、こちらに、ある一つの鮮明なイメージを喚起するものがありますね。自分のことを振り返って羨しく思います。

そうかな。

—いかがですか、建築家としての空間感情の形成という面で、新潟時代の幼児経験がどんなふうに関わっているか、という点は……

さあ、そんなことはわからんよ、自分では。ただね、ほかにもいろいろあるけど、よくいろんな光景を断片的に思い出すね。お堀端にね——運河だけ——、柳の木がすうっと並んでるとこに、大きなボートが甲羅を干している風景とか、それから、これはもういよいよ新潟を離れて東京へ行くというときだけでも、万代橋を渡って人力車で駅へ向うときにね、木の電柱が橋に沿って川の中に並んでいるんだよ。……

—川の中に、ですか。

そう。水の中から頭を出しているわけね、電柱が。その川の、青黒い水の面に、何台か続いて走ってる人力車の影が、ちらちらと揺れているのと、電線がね、こう上ったり下がったりするのを、ひじょうによく覚えてるね。〔註23〕

ここで語られる前川の回想は、その当時の音や光、天候、時刻などの状況をありありと喚起するようである。「よく」目にした火事とは、おそらく1908（明治41）年3月8日の大火や、同年9月4日出火した火事のことだろう。ともに新潟の市街地で発生し、前者は信濃川に架かっていた木造の万代橋を焼失させる規模であった。転居直前に渡った万代橋は火災後設置された一時的な橋で、往事の写真（図6）を見てみると、確かに川面から突き出た電線が特徴的である。前川が座談を得意としていたことは、生前、日常的な聞き手であった設計事務所員の多くが回顧するところであるが〔註24〕、たしかにインタビューをした宮内が途中で指摘するとおり「映像」として浮かんでくるような、三次元的な興行きと臨場感を持った思い出だと言える。

幼少期の鮮やかな個人的記憶が重要なのは、インタビュー当時は「新潟時代の幼児経験」が建築家としての設計にどんなふうに関わったのか漠然としていたとしても、その後の当館の設計の内容に具体的に結びついていくからである。当館の設計趣意は、1982（昭和57）年新潟市に提出された設計競技応募案に詳しくまとめ上げられているが、両者の関係を考える手がかりとなるのが、前川が遺したスケッチブックである。

スケッチについての考察

現在、前川建築設計事務所には、生前前川が描き溜めていたスケッチブックが数多く遺されている。設計事務所の所員に指示する前段階の、前川自身の手による素描や短文、単語などから成るメモである。実現しなかったアイデアも含めて、前川の思考の軌跡を辿る上では重要な資料となっており、前川の最晩年、建築作品集を編纂するに当たって、編集チームの手で整理が始められた〔註25〕。

そのうち、筆者が新潟市美術館との関わりを確認している13葉（文末図A～M）について紹介したい。晩年、前川はパーキンソン病に冒されており筆を執る手が震えていたとされることから〔註26〕、正確な解読が困難な箇所もある。しかし、繰り返し登場する単語や推定し得るおおよその年代から、当館の設計にどのように前川のアイデアが息づいているかを跡づけるこ



図5 〔挿入引用者〕1905～1909年頃のイタリア軒
（出典：岡田民雄『イタリア軒物語』新潟日報事業社、1974年、54頁）

註22 〔引用者註〕新潟が開港して間もなく来日したイタリア人、ピエトロ・ミリオールが1874（明治7）年に創業した西洋食品店。81（同14）年には、市内の西堀通7番町（現新潟市中央区）の地で西洋料理店としての営業を始めた。1976（昭和51）年より、宿泊設備を備えたホテルとしての運営を開始。新潟市美術館からは徒歩圏内に位置する。前川は当館工事の際、定宿にしていたと言われる。現在も同地で営業。

註23 「一建築家の信條」17-22頁



図6 万代橋(1908～1909年頃)
（柏崎市立図書館所蔵〔小竹コレクション〕）

註24 前川國男設計事務所OB会有志著、建築思潮研究所編『建築ライブラリー17 前川國男・弟子たちは語る』建築資料研究社、2006年

註25 前川國男著、前川國男建築設計事務所企画、宮内嘉久編集事務所・前川國男建築設計事務所編『前川國男＝コスモスと方法』前川國男建築設計事務所、1985年、242-244頁

註26 佐藤由巳子「大将の器——私の見た晩年の前川國男」、『建築ライブラリー17 前川國男・弟子たちは語る』226頁

註27 横山聡「前川國男の最晩年」、『建築ライブラリー17 前川國男・弟子たちは語る』190-192頁

註28 『新潟市美術館設計競技記録集』12頁

註29 lantern (手揚げ型ランプ、角灯の意。英語)。重厚感のある建築のボリュームに対し、ガラスを巡らせた小ぶりの居室を取り付ける手法を前川は好んで用いていた。その形態や素材の質感、夜間にこの空間にだけ照明が灯る様子から、「ランタン」と呼んでいた。

註30 複層になったガラスのこと。断熱性や遮音性に優れた建材である。

註31 『新潟市美術館設計競技記録集』12頁

註32 『新潟市美術館設計競技記録集』75頁

註33 『新潟市美術館設計競技記録集』85頁

註34 2004~2005年に実施した大規模改修に際し、竣工時の塩害対策が有効に機能していたことが実証された。詳細は、演興治、藤原工、中矢清司「新潟市美術館の照明リノベーション」(『電設技術』2006年7月号、社団法人日本電設工業協会、2006年、107-115頁)に詳しい。

註35 たとえば、平良敬一は戦前・戦時中の設計に前川が見せた日本の伝統に対する捉え方を視野に収める必要を指摘している。(平良敬一「前川國男と風土」、「生誕100年・前川國男建築展」118-119頁)

註36 横斜路の意。スロープ。

とができる。

まず、制作年代が明らかなのは、『前川國男＝コスモスと方法』(1985年)に、1979年制作、「原風景」の題で掲載された図Aである。添えられた柳並木と堀割の絵は他のスケッチでもくり返されるモチーフであり、どの絵でも柳の木が水面に映り込んでいるのが特徴的である。ほぼ同じ内容、順番の文章が書かれた図Bも同時期の制作と考えるとよいだろう。いずれも、日本海と砂丘、住まいの傍の白山神社(現存)への言及以外は、先に抜粋した『一建築家の信條』での発言の内容と同じである。同著の原稿の元となったインタビューは1970年代末に行われていることから、この2葉のスケッチはインタビューに前後してあまり間を置かず記されたと思われる。当館設計競技への参加を募ったのが1982(昭和57)年のことであるから、この2葉のスケッチを描いた時点では、当館設計はまだ念頭になかったのではないだろうか。

他の11葉のスケッチについては、年代が定かではないものの、先の2葉より後、新潟市美術館のコンペ応募案制作段階で描かれたと推察される。当時前川は、「幼少の頃を過ごした場所」とあって「コンペへの意欲も並々ならぬものがあつた」とされ、毎日、担当の所員の机に来てはスケッチでスタディを示したという(註27)。図Cは幾つかのパスとプランと思しき素描から成るが、一番上に描かれた大きいパスでは、図A中の柳と堀割を現在の公園側に再現するほぼ現況どおりの案が見てとれる。向かって右側には美術館の建物があり、公園との間に道路のような空間が描かれている点などから、建設予定地として当館の具体的な敷地が既に念頭に置かれている段階、すなわち1982(昭和57)年に以降に描かれたと言えよう。設計競技要項中の「外構計画は、全面道路の向い側に計画している公園も含め、道路で分断されている感じをあたえないように公園との一体化を図る」(註28)という要件を考慮した案を考えようとしていたのだと想像される。

図Eは「風土と建築」の書き出しで始まるが、ここには以降図Lまでのスケッチにも繰り返し登場するキーワードが書かれている。年代は明らかではないものの、総じて、言葉によって新潟市美術館の設計意図を練り上げようとする姿勢が窺えることから、やはりコンペ案の準備過程、すなわち1982(昭和57)年に書き留められたのではないだろうか。『一建築家の信條』で披露した幼少期の記憶を出発点としながらも、具体的な設計に関わる項目も記されている。たとえば、企画展示室の休憩室として実現することになる「展示室にランタンをつける」(註29)(図G)や、冬季の気候を考慮した「ペアガラスの使用」(註30)(図F)など、実施設計に取り入れられた要素が記されていることがわかる。最終的に提出された応募案中、スケッチの中で構想された項目立てで「風土と建築」が文章で綴られることはなかった。ただ、設計競技要項中の設計要件として最初に掲げられた「計画に当っては、新潟市の気候風土を十分に考慮したものとす」(註31)という課題に対し、新潟市の歴史的な背景や景観を踏まえた意匠で応じようとした案は、前川案のほかは安井建築設計事務所が雁木や堀割等を意匠に採用している例しかなく(註32)、その安井案も前川案ほどには風土に対する解釈を評価されなかった(註33)。自分自身の経験として、実感を伴って昔日の新潟の街並みを知っていたことが、設計に強く影響していたことが確認できる。無論、冬の厳しい気候に配慮した素材選びや、海からの風向きを考えた開口部の位置決め、塩害対策(註34)、断熱対策など、より専門技術の見地から立地環境を調査理解に努めていた事実も忘れてはならないだろう。

前川國男の建築における「風土」という問題を考察することは、それだけで彼のキャリア全体を俯瞰する目と、専門的に一つひとつの作例とを読み解いていく作業とを必要とする大きなテーマへと拡げ得るが(註35)、ひとまず本稿では、最晩年の設計においても前川が風土について積極的に語ろうとしていたこと、そこに幼き日の個人的なイメージを重ねあわせていたことが窺えるところに、当館の設計の特殊性があることを記しておく。

前川建築としての新潟市美術館

では、当館の「前川建築らしさ」はどこにあるのだろうか。設計競技提出時の案がほぼそのまま実現している箇所ということで言うならば、展示会を観覧しに美術館を訪れる人々の自然な動線上に広がる空間、すなわち、公園からのアプローチ、エントランスホールに始まり、喫茶室周辺、ランプ(註36)、市民ギャラリー、企画展示室および休憩室、常設展示室へと至る空間の構成であろう。後述するが、それ以外の部分——いわゆる美術館における「バックヤード」——に比べ、初期の段階から具体的なイメージを持って設計されていた部分だと言える。

設計者のほぼ当初の構想どおりに仕上がったこれらの部分について、「前川建築らしさ」を具体的に読み解くことを、ここで試みてみたい。当館に関する資料にくわえて手がかりとするのは、『前川國男のディテール 熊本県立美術館をととして』〔註37〕という文献である。1977 (昭和52) 年に竣工した熊本県立美術館は、前川の建築作品の中で一つの到達点と見なされている。同書は、熊本県立美術館という一建築作品の幾つかの部分を取り上げ、文章、図面、写真によって記述することで、前川の建築全体を貫き支えている特徴をあぶり出そうという意図のもとに編まれた本である。前川國男にとって、ディテールとは、ただ「細部」を意味するというよりは、建築が建築として実在感ある存在になるための欠かせない要素だとされる。だからこそ、建築家自身が設計上特に力を注ぎ、したがって、その建築家の個性が最もよく表れる部分だと言う〔註38〕。

無論、新潟市美術館は全く別の建物であり、事実、当館は、熊本県立美術館ほど代表作とは目されてはいない。しかしながら、その後の晩年にかけて建てられた、同じ公立美術館であるという点で比較し得る対象になるのではないだろうか。筆者は建築の専門家ではないため、構造や技術についてというよりは表面的な特徴の言及に力点を置くことにはなるが、ここで試みるのは強引に当館の建築の評価を高めることではなく、「前川らしさ」を語る上での着眼点を参照し、新潟市美術館の建物を再検討することである。おおよそ、同書が熊本県立美術館を巡ったような手順で〔註39〕、当館の建築的な特徴と改修による変更箇所があればその概要について、一つずつ述べていく〔註40〕。

(1) たたずまい

新潟法務合同庁舎や新潟地方合同庁舎などの公的機関と、戸建てを中心とする住宅街が広がる閑静な地域にあって、修景に配慮した落ち着いたたたずまいをしている。開館記念樹のななかまどが植えられた南向きの空間はそこだけ屋根が吹き抜けており、建物の途中から樹木が生えているように見える。窓上には、「開口部らしさ」を演出するためのプレキャストコンクリートによるまぐさ石〔註41〕が取付けられ〔註42〕、ファサードにリズムを与える効果をもたらしている。形状は同時期に建てられた東京大学山上会館 (1985年竣工) などにも見られるアーチ型で、当時設計のチーフを担当した高橋義明によれば、前川の「コンクリートを鋳型に流し込むイメージ」を具体化したものであり、積雪対策用の庇としての機能も担っている〔註43〕。(図7)

(2) アプローチ

道路を挟んで美術館と向かい合う西大畑公園には、柳の木の間並ぶ堀割を模した水路が設けられている。柳のそよぐ堀割は1964 (昭和39) 年の国体開催準備による市街地開発以前は、新潟の街中の各所に見られた景観であった。水路から美術館の方へと視線を向けると、その延長線上に美術館のエントランスが位置し、プランの上ではさらに奥、館内中庭の「海の庭」の池が位置している。公園側から歩みを進めると、美術館の敷地と同じパターンのインターロッキングブロックが敷かれていることによって、来館者は自然と館内に導かれるようになっている。実際の現場では遮蔽物が多く、海の庭の池までを一時に視界に納めることはできないが、2015 (平成27) 年のリニューアルでは、堀割の延長線上、美術館のアプローチの階段上に鮮やかな緑色のシンボルマークのオブジェを設置し、視覚的に誘導する上での工夫を加えた。(図8)

(3) 山の庭・海の庭

新潟市美術館には、ランプのスロープに面した「海の庭」と企画・常設両展示室間のロビー外に広がる「山の庭」という、異なる特徴を持つ二つの庭がある。海の庭は、庭の敷地を取り囲むようにしてコンクリートの柱が7本列柱のように立ち並び、水平な軒屋根と組み合わせることによって神殿のような、あるいは中世の教会の回廊のような雰囲気を生み出している。広場の中央には正方形の池があり、「ランタン」と前川が呼ぶ形状の企画展示室の休憩室が水面に浮遊するかのように設置されている。時間帯によっては、池の水面に反射するチラチラとした陽光が休憩室内に差し込むようになっている。

山の庭には、旧新潟刑務所時代からある5メートル高の塀に寄せて建設時の掘削土が盛られ、青々とした苔に覆われた斜面として横たわっている。岩手の山林から取り寄せられたブナ

註37 前川國男・M I D同人『前川國男のディテール 熊本県立美術館をととして』彰国社、1979年

註38 『前川國男のディテール 熊本県立美術館をととして』4-5頁

註39 同書で言及されているのは、次のとおり (番号は掲載の順)。

- 1 たたずまい 2 アプローチ 3 アプローチのディテール
- 4 エントランスホール回り 5 打込みタイトルのディテール
- 6 打込みタイトルの施工法
- 7 エントランスブースのディテール
- 8 ロビーおよび吹抜けホール 9 吹抜けホールの階段回り
- 10 食堂・喫茶テラス回り
- 11 スチールサッシの標準ディテール
- 12 手摺のディテール 13 格子梁とモジュール
- 14 型枠 (格子梁) の施工法 15 展示室および照明計画
- 16 展示ケースのディテール 17 装飾古墳室の展示計画
- 18 床と中木の納まりディテール 19 多目的室回り
- 20 多目的室のディテール
- 21 多目的室の可動間仕切りディテール
- 22 講堂のディテール 23 搬入路回り 24 管理事務室回り
- 25 収蔵庫のディテール
- 26 収蔵庫の屏風立のディテール
- 27 収蔵庫の収納ラックのディテール 28 収納棚各種
- 29 機械室および底盤 (二重スラブ) 回り
- 30 各種標準ディテール 31 雑詳細 (建具)
- 32 雑詳細 (家具) 33 照明器具のディテール
- 34 外構および照明計画
- 35 熊本県立美術館と他館との大きさ比較

註40 なお、前川の建築作品としての当館の特徴を、建築家としての生涯とあわせて広く普及するため、2015 (平成27) 年、『前川國男：新潟から新潟へ』(星野編著) という小冊子を制作し館内で配付している。

註41 窓、出入口口などの上に水平に渡した石。

註42 米盛和孝「ニュース〈建築〉新潟市美術館」、『日経アーキテクチャ』1985年12月2日号、日経マクロウビル社、1985年、135頁

註43 「BCS賞受賞作品探訪記27 第27回受賞作品 (1986年) 新潟市美術館 前編」、一般社団法人日本建設業連合会広報委員会『Ace建設業界』2015年2月号、一般社団法人日本建築業連合会、2015年、49頁



図7 窓ガラス上のまぐさ石 (撮影：今井智己)



図8 西大畑公園から見る新潟市美術館 (撮影：今井智己)

の木など、様々な種類の樹木が林を形成し、春の新緑から冬の枯木立まで四季折々の変化を見せる。竣工時はインターロッキングブロックが敷かれた広々とした庭であったが、1994（平成6）年の常設展示室増築に伴い面積は大幅に縮小された。結果、増築部分に植えられていた樹木類を移植して植栽の密度が上げられ、地面も石敷に変更された。

いずれの庭も、展示鑑賞の合間の安らぎをもたらす役割を果たしており、現在では無料で楽しむことのできる散策路となっている。なお、屋外には野外彫刻も展示されている。

(4) エントランスブースのディテール

設計競技応募案とはやや異なるかたちで竣工した箇所である。最初、その他の居室同様敷地に平行する北東向きの玄関として考えられていたが、最終的には約45度の角度を付け、南向きの出入口とされた。平面図で見ると風除室部分だけが傾いているのがよくわかり、来館者を誘い込む工夫となっている。開口部の方角は海風の影響も考慮されている。およそ立方体のような空間は雪国のかまくらをモチーフにしているとされ、一歩足を踏み入ると、目に鮮やかな壁の朱色のタイルに出迎えられる〔註44〕。天井は原色に近い青色である。ボリュームとしては小さいながらも、存在感のあるエントランスブースとなっている。（図9）

註44 米盛、136頁



図9 風除室(エントランスブース)の外観(撮影:今井智巳)

(5) エントランスホール

天井高の低い玄関の風除室を抜け出ると、エントランスホールの、前川の言葉で形容するところの「たぶたぶ」、すなわちゆったりとした余裕のある空間が視界いっぱいに広がる。天井は一面水色に塗られ、さながら青空の印象である。吹き抜けの空間となっているため、2階講堂前の様子を望むことができ、2015（平成27）年の改修以降は、「本のラウンジ」と呼ばれる読書スペースの灯りが常に点る様子も一時に見えるようになった。

従来は、玄関に入ってすぐ左手の受付カウンターが観覧券を購入する場となっていたが、混雑時には入口付近に来館者が滞留してしまうことが課題となっていた。直近の改修工事では券売場所としてカフェ側の方へカウンター機能を移し、また、来館者にわかりやすいよう電光掲示板によるデジタルサイネージも導入した。本来の役目を終えた旧受付カウンターは意匠的に凝った作りでもあったことから取り壊さずに保存し、背面壁に美術館の平面図や展覧会ポスターの掲示板を取り付け活用することとした。

また、2013（平成25）年以降はエントランスホールに常設のミュージアムショップを新たに開店、営業している。建築的な観点から言えば、空間の広さがわかりづらくなったのは事実ではあるが、美術鑑賞以外の様々な愉しみを提供することが他の美術館でも当然のサービスとなりつつある中で、時勢に適った変更であった。美術館でこそ購入できるような、展覧会関連グッズ、雑貨、図録、書籍などが賑やかに並ぶ空間に変わった。

(6) 打ち込みタイルのディテールおよび施工の特徴

前川独自の打ち込みタイルの技法が、当館の外壁と館内の一部に用いられている。壁を施工する際、液状のコンクリートを流し込む型枠にあらかじめタイルをセットしておき、コンクリートとタイルとを同時に固化させる。風雪や衝撃に強く、タイルの剥落の危険性を抑えることができるのと同時に、タイルとタイルの間にくっきりとした陰影を作り出すことのできる方法である。1960年代から用いられるようになり、その都度改良されてきた技術であるが、当館の場合には耐候性を増すため、タイル仮取り付け用の釘がステンレス製とされ、フォームタイ〔註45〕用の穴にもコーキング〔註46〕を施した上で施工された〔註47〕。

当館のタイルには緑釉のかかった炻器質のタイルが用いられている。かつてこの地に建っていた赤レンガの外壁の新潟刑務所との重複を避けることと、「表面のガラス質の反射具合により、日差しの強い季節や時刻には、全体が鮮やかな緑色となり公園の緑と同化し、日差しの弱い時には土蔵のように黒く変化し、際立った存在となる」効果をねらい、この材質が選ばれている〔註48〕。

(7) ランプ

エントランスホールと企画展示室とを結ぶ細長い形状をした空間で、この部分の内観を撮影した写真が、前川の没後間もなく刊行された『前川國男作品集－建築の方法』〔註49〕に、前

註45 打設用の型枠を固定するための金具。

註46 接合部の隙間を埋め、気密性、水密性を高めること。

註47 米盛、135頁

註48 米盛、137頁

註49 宮内嘉久編『前川國男作品集－建築の方法』1、美術出版社、1990年、44－45頁

川の「作風」を表す空間の一つとして収められている。窓ガラス越しには海の庭が、また、進行方向の反対側には市民ギャラリーが位置する。地下の常水位からの影響を減じ、作品の安全性を確保するため、当館の展示室は前面道路からは2m、玄関のアプローチからは1m高い位置にあるが、その高低差をゆるやかにスロープで繋いでいる場所でもある。また、立地条件に配慮することに加え、展示室までをゆとりのある道程とすることで、「日常性から離脱し、芸術と出会う心の準備をする」時間を空間として実現することを前川は大切にしており〔註50〕、当館の場合はランプがこの役目を果たしていると言えよう。展示会場に向かう際には、スロープを上っていく運動の方向性が芸術と出会う高揚感を、帰り道には視線の先に遠く西大畑公園を見ながら日常へと下りて行くような気分をもたらしている。なお、設計競技に提出された内観パースにも、現況にかなり近いかたちで描かれている(文末資料)。スロープ途中の平坦な踊り場は、館内を通らずに海の庭側から直接市民ギャラリーへと立ち入るルートとして想定されているものの、実際にそのような経路で入場する来館者はほとんどいない。

註50 「前川國男のディテール」12頁

(8) 喫茶室および喫茶テラス回り

喫茶室(2015年以降は、「カフェ」で呼称を統一)は、館外と館内の両方からアプローチできるようにしており、店内からは季節により移り変わる公園の景色を眺めることができる。南面する公園側の扉を出た場所には、庇の下をテラス席として使用することも可能なように設計されている。2015(平成27)年のリニューアル以降は特に、扉部分の段差を解消し自動ドアとしたことなどによって、公園側入口の利用者も増えてきている。

内装は茶色がかった黄色い壁で統一され、日中降り注ぐ陽光の効果もあり、柔らかな雰囲気を感じられるようになっている。床は焦茶色のレンガが網代状に敷き詰められている。30周年の改修では、キッチンやカウンターの形式も改善され、テイクアウト用の商品の提供など、より多様な形態の営業に対応できるかたちとなった。

(9) スチールサッシュ

寒冷地であり、日本海からもおよそ300メートルの土地に立つ当館のサッシュには、耐候性鋼が用いられている。窓に大きなガラスを用いるのが前川建築の特徴であるが、新潟市美術館の場合、エントランスホールの吹き抜け部分や常設ロビーの窓にはペアガラスが使用されている。これによって、断熱性を高めて省エネ効果を上げつつ、視覚的には、屋内と屋外の空間を緩やかにつなぐことに成功している。ガラスは、万が一破損した場合に備えて寸法を統一しており、交換用のスペアも用意された〔註51・52〕。

註51 米盛、137頁

註52 建築思潮研究所編『建築設計資料13 美術館』建築資料研究社、1986年、137頁

(10) 企画展示室

企画展示室は、珧器質タイル敷きの前室で結ばれた計3つのカーペット敷きの床の部屋からなる。4mの天井高からなる展示室1と2は、ほぼ等しい形をした空間であり、長方形の一部が重なり合うプランとなっている。展示室1には可動壁で覆い隠して使用することが可能な壁付ケースが備えられている。展示室3は5m高の天井になっており、設計者の側では、公開制作用の「スタジオ」として用いるなど、自由度の高い使い道を想定していたようである〔註53〕。コンペに応募した時点では、動線計画の明確さが掲げられていたが〔註54〕、現実には観覧順路に戸惑う観客も一定数おり、また、企画によっては反時計回りでの展示順路で展示することも少なくなかった。そこで、2015(平成27)年の改修では各室の入口に取り付けられた「展示室1」「展示室2」「展示室3」の表示は全て取り外し、より自由な使い方ができるようにした。また、竣工当初から天井部の水平・垂直方向のレールに沿って可動壁を建てることが可能であったが、動線のパターンに限られてしまうため、組み立て式の展示壁面も別途導入し、より多様な展示方法が行えるようにした。

註53 「新潟市美術館設計競技記録集」35頁

註54 「新潟市美術館設計競技記録集」34頁

(11) 床と中木の納まりのディテール

床および中木の素材には珧器質のタイルが用いられている。外壁部分とは異なり、マットな表面を持つタイルが選ばれている。床は焦茶色と赤茶色の2色のタイルの敷き詰めからなり、焦茶の部分は網代貼、赤茶の部分は、エントランスホールでは中央から時計回りに渦を描くように敷かれている。

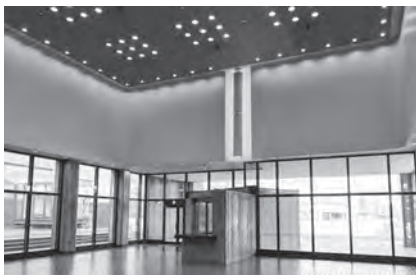


図10 エントランスホールのシャンデリア
(撮影：今井智己)



図11 衝突防止用シール (デザイン：亀倉雄策)

註55 前川建築設計事務所によると、東京文化会館（1961年竣工）の建設に際し、グラフィック・デザイナーの亀倉雄策（1915-1997、新潟県燕市出身）によりデザインされたとされる。ほか、東京都美術館（1975年竣工）にも用いられた。前川と亀倉は生前交友があった。

註56 中川帛子「前川先生の色、いろいろ」、『建築ライブララー17 前川國男・弟子たちは語る』99-100頁

註57 『新潟市美術館設計競技記録集』36頁

註58 以下、「」で示した工事の名称は、正式な事業名。

註59 在任期間1985（昭和60）年4月～1995（平成7）年3月。

巾木は、焦茶のレンガの小口や長手を並べることで処理されている。当館の壁のうち、ブラスター塗で仕上げられた出隅や入隅の多くがアールで仕上げられているが、その場合も曲面に沿ってきちんとレンガが並べられており、施工の丁寧さが感じられる部分となっている。

(12) 家具・照明器具

建物の設計とあわせて、覗き型・行灯型の展示ケースや掲示板、案内板などの什器類や照明器具も設計事務所の選定を受け納品された。そのほとんどが他の前川の設計した美術館・博物館などで用いられている既製品と同じものである。展示室や待ち合いスペースのためのスツールおよび机については、脚の形態などが当館用に一部設計し直されており、製造は株式会社天童木工である。2015（平成27）年度の改修に際し、古くなった貼り地や木枠の傷の修繕を同社に依頼したところ、30年前の竣工時に貼り地の材質や木部の色を選定した際の資料が保管されているのを確認することができた。張り地については、当時と同等の色味ではなく、館内職員で検討し、新たに8色のパリエーションを持たせ視覚的な楽しさを演出することとした。

照明器具のうち特筆すべきは、エントランスホールに取付けられた巨大な筒状のシャンデリアである。背後の曲面の壁が反射板となり、周囲に柔らかく光が拡がるようになっている。中央にはアクセントとして、窓ガラスの衝突防止用シールと同じ8の字型の金色の装飾が取付けられている（図10・11）〔註55〕。

(13) 色彩計画

前川は、冗談で「建築家にならなかつたら、僕はペンキ屋さんになりたかつた」と口にする程、自身の建築の色彩計画にはこだわりを見せたそうである。壁面や家具の色決めをするときには現場に駆けつけ、塗料の既成のカラーチャートから選ぶのではなく、自らのイメージで色味について細かい指示を出し、塗装や選定の作業に立ち会ったという〔註56〕。

当館の場合も、「展示作品以上にモノを言うてはならないという原則」が内装計画の指針とされてはいるものの、総じて暖かい色調でまとめられ、展示室は白っぽく仕上げられている〔註57〕。エントランスホールから喫茶室や市民ギャラリー、常設展示室に至るまでの壁の多くは、「からし色」と前川が呼ぶ落ち着いた黄色で塗られ、ランプの突き当たりから企画展示室前室は、同じく「べんがら色」と呼ばれる朱色に塗られた。水色に彩られたエントランスホールや常設ロビー、休憩室、トイレに向かう部分の天井の石膏ボードは曇天の多い冬の新潟を考慮してのことであろうか。そのほか、風除室の天井、1階給水器背面の壁、2階講堂ロビーの壁の一部は、原色に近い青色が塗られた。

しかしながら、その後、エントランスホールの壁のからし色は1994（平成6）年に、ランプ突き当たりから企画展示室前室壁のべんがら色は1995（平成7）年に、白色に塗り替えられた。両方とも、作品を置く可能性のある空間であることから、一層の中立性を求めている判断であったと考えられる。2015（平成27）年の大規模改修時には、からし色について、既製品の番号からでない混色による塗り直しを行い、できるだけ竣工時に近い色味での塗装が心がけられた。

当初からの改変——30年間使い続ける

新潟市美術館は、1985（昭和60）年の竣工から、およそ10年毎に計3回の大規模な改修工事を行ってきた。工事の目的には、概括すると、収集・保管・展示という美術館の機能が十全に果たせるようにすることと、時代毎の公立美術館を取り巻く環境に配慮すること、二つの側面があったと言える。3度の工事について、その概要と背景や意義に関する考察を次に記す。

(1) 1992～1994年：「常設展示室増築工事」〔註58〕

開館以来、最初に行われた大規模改修工事である。主な内容は、常設展示室の増築、2階倉庫の収蔵庫化、展示室・収蔵庫系統の空調設備の改修、搬入口の増設、企画・常設両展示室の壁付き展示ケース用空調機の新設である。

本工事の主たる目的であった常設展示用スペースの拡大は、早くも竣工当初から館内で望まれていた。開館後間もなく行われた建築専門誌の取材の中で、初代館長の林紀一郎（1930-）〔註59〕は「一階の常設展示室は、将来増加する館蔵品の展示および温度調節を考えると、

もう少し広く、天井も高い方がよかった」〔註60〕とコメントしている。最初の常設展示室は、壁付きの展示ケースを備えてはいたものの、床面積は221.90平方メートルと企画展示室全3室の3分の1以下、壁面長は49.30メートルであり、展示可能な作品点数は、多くても20点程度といったところであった。

そこで、美術館側からは、展示壁面を従来の約3倍の長さには拡張すること、ならびに大型作品の展示が可能な天井高を確保することなどが具体的な要望として上げられた。これを受け、1991(平成3)年頃から前川建築設計事務所において設計作業が始められ、「美術館の新しい顔として、企画展示室とは違う雰囲気をもった展示室造り」、「アプローチする時に、常設ロビーから見える『常設展示ブロック』が、魅力ある形を持っている事」、「飽きのこない展示室の空間展開」などを基本設計の趣旨とする増築計画が作られた〔註61〕。関係者間での検討、協議の末、天井高と床面積の異なる大・中・小3つの展示室で新常設展示室を構成する現在の案が採用された。

また、同じ予算の範囲内で、2階の倉庫を収蔵庫に改修することも工事の要件として施設側から上げられた。当該の区域は、竣工時点では躯体のみ施工されており、倉庫と云えども開館後運用を進める中で、空調や内装工事を追加した上で収蔵庫として利用できるように用意されていた場所であった。実質的な収蔵作品数が増加してきたのに従い、本工事で併せて改修することとなった。

この第一回目の大規模改修工事の基本的な性格は、美術館の事業の幅を拡大する点にあったと言えよう。開館当初500点に満たなかった収蔵品は改修時点で3倍近くに増えており、特に1991～1992年度にかけては、ウジェーヌ・カリエール(1849-1906)の絵画と版画作品計29点をまとめて購入するなど、拡大するコレクションを保管・陳列するスペースが必要になってきていたことが背景にある。そのほか、1993(平成5)年には長岡市に新潟県立近代美術館が開館し、最新の設備と広々とした展示空間を備えた公立美術館が同じ新潟県内に誕生したことから、当館としても肩を並べ得る施設を、という施主の意向も影響していたと言えるだろう。

(2) 2004～2005年：「美術館施設改修工事」

開館から20年目を迎えるに当たって行われた二度目の大規模改修工事は設備工事を主な内容とし、老朽箇所への対策や保存環境面での機能の強化に主眼が置かれていた。主な工事内容は、企画展示室の照明改修、空調設備改修、給水配管工事、企画展示室前室の遮光・防犯対策であった。

企画展示室の照明については、鑑賞環境をより良くすることを目的に、当初設置していた美術館用のFLR型蛍光灯をHF型蛍光灯へと更新し、壁面照度の均一性や色温度、演色性を向上させながら省エネ化を図る工事を行った〔註62〕。また、工事前は企画展示室前室の排煙窓から自然光が入り込むつくりとなっていたが、作品保護の観点から完全に塞いで遮光した。開館間もない頃には「最近では美術品を過保護にするなどという風潮があり、積極的に自然光を取り入れる展示室があってもよかった」〔註63〕との声も美術館側から上がっていたことを考えると、20年の間での保存環境に対する考え方の変化が垣間見られる。また、企画展示室各室に設けられた3室の休憩室にはそれぞれ非常口が備えられているが、紫外線の遮断と防犯性能を持ったフィルムがガラス面に張り付けられた。なお、これらの休憩室は、現在ではほとんど閉め切っており、使用しない場合の方が多い。展示鑑賞中のひと時のやすらぎの場として、屋外に面したこれらの小部屋は建築的に魅力を備えた空間であることは確かである。重厚なタイル貼りの量塊に取りついた、小さなガラス張りの部屋——前川が呼ぶところの「ランターン」——は、外観上のアクセントでもある。しかし、外気の影響や害虫の侵入、盗難の恐れなど、屋外空間に隣接しているが故に生じるリスクの発生をできるだけ抑えるため、休憩用のスペースとしては現在では開放を控えていることも書き記しておく。

(3) 2014～2015年：「30周年大規模改修」〔註64〕

開館30周年にあわせて実施した本改修は、老朽化対策が第一の目的であった。しかし、単純にマイナスの状態にある箇所をゼロに戻す以上に、来館者と展示に配慮したバージョンアップを図り、既存の施設を活かしつつも美術館としては生まれ変わることがより強く意識されていた。

註60 「運営者からのコメント」、『建築設計資料13 美術館』138頁

註61 前川建築設計事務所『新潟市美術館常設展示室増築工事設計説明書』

註62 詳細は、濱ほか「新潟市美術館の照明リノベーション」(前掲書)に詳しい。

註63 米盛、137頁

註64 本工事の概要については、筆者により一部を発表している。(星野「事例報告：新潟市美術館の改修について」〔公開承認施設会議、文化庁文化財部美術学芸課主催、於文化庁、2015年11月7日〕)

第一の目的に関する工事の概要を述べると、空調については、既存機器のオーバーホールと新規機器の導入、常設・企画両展示室の壁付きケース内空調の更新、2階収蔵庫内の気流改善、1階収蔵庫前スペースの空調化を行った。防火・防犯面においては、ハロン消火設備および監視・警報設備を更新した。

これに加えて「新生」新潟市美術館を意識することになったのは、市民の間にある館のイメージを一新したかったからである。過去5年の間に、組織・体制の在り方が社会的な問題となる事態を経験していたことも〔註65〕、大きな動機付けとして働いていた。老朽化対策を目的とした工事の難点は、自ずとバックヤード、すなわち来館者の目につきにくい箇所の工事となるため、「どこを直したかが市民にわかりづらい」ことである。したがって、今回の工事では来館者の視点からよりリニューアルすることを目指した。具体的には、まず、講堂のAV機器を最新の設備に刷新し、内装材も明るい色調へと変更した。また、かつて1階の奥まった位置にあった図書室を2階の講堂前に移転した。機能も、資料閲覧だけでなく、くつろぐスペースとしても使用できることを心がけた。代わりに、かつて図書室があった空間は多目的スペースとして開放することとした。これらの新しい居室については、職員で名称を考え、前者は「本のラウンジ」、後者は「ラウンジN」と命名した。空港のラウンジのように自由にゆったりと過ごしてほしいという意味をこめている。ちなみに、「ラウンジN」のNは、新潟のN、利用者数だけ「N通り」の使い道があること、開館記念樹ななかまどのNでもある。

ほか、館の印象を大きく左右する工事として、各部屋の名称や動線を案内するサインシステムを刷新した。従来は、竣工時に建築と一体的に設計されたものを用いていたが、今回、グラフィック・デザイナーの服部一成（1964-）に依頼し、現代的な感覚でわかりやすいサインに変更することを試みた〔註66〕。服部は、2012（平成24）年、東京国立近代美術館の改修に際しても常設展示エリアのサインや作品キャプションなどをデザインした実績がある。また、当館のロゴタイプとシンボルマークも手掛けたデザイナーであり、サインの変更は、美術館としての視覚的なアイデンティティを統一することにもつながっている。

展覧会も来館者の目に触れる最も重要な美術館の事業であるが、その展示活動の幅を広げるため、気密性の高いエアタイトの展示ケースを導入した。脆弱な文化財の展示に適した什器として全国の美術館・博物館で普及が進んでいること、当館でもそのような作品の展示機会が増えることを見据えた上での判断である。また、企画展示室の一部の照明と、常設展示室のすべての照明、両展示室で使用するスポットライトをLEDに更新した。LED照明は近年急速に普及が進むものの、ミュージアムでの導入についてはまだ試行的な段階にある。今回の当館の改修では、設計事務所、照明メーカー、専門家、施工業者と美術館職員とで実験や検討を重ねた〔註67〕。今後は、実際に運用しながら使用者の立場で改善点を洗い出し、研究の進展を俟つことで、将来的な改修工事へとつなげていくことが課題である。

経験を蓄積し「ハコ」であることを乗り越える

1970～80年代にかけて、全国の地方公共団体によって公立文化施設が相次いで建設された状況は、「ハコモノ行政」の名で揶揄されることが多い。行政が、文化・芸術事業の実施を目的とした器としての建物を建てることに費用を注ぎ込みながら、オープン以降のランニングコストや運営体制、収蔵品について十分に考慮せず「美術館を作ること」を何よりの目的としてしまいがちな建設の在り方を皮肉った言葉である〔註68〕。新潟市美術館の場合を考えてみると、建設経緯にも見られるとおり、まさにこの社会状況を背景に建てられているし、「ハコ」である美術館の内側に住まう主体の存在や具体的な活動が希薄なまま建設されたことは否めない。先に引いたコンペ提出案の総評中、バックヤード、つまり職員の執務室や動線に対する解の多様さが指摘されていたこと、結果として、それらのエリアに対する各案の回答は評価の中心にならなかったことが示されていた。これは、見方を変えれば、建設の計画段階で、美術館を職場として過ごす者が深く関わらなかったことの現れである。オープン当時の資料にも「設計の最初の段階で館長や学芸員が決まっていれば」という設計者側の意見や、「重要な施設になればなるほど、その体制が決まるのが遅れる。我々の今後の課題だ」という新潟市の営繕部局の反省が伝えられる〔註69〕。

コンペの審査員や指名業者の人選を見れば、確かに建築業界で経験のある人物の協力を得ており、「地方自治体の施設建設に対する当局の高い見識を示すイベント」〔註70〕であったに

註65 2009（平成21）年から翌10（平成22）年にかけて、「カビ・クモ事件」などの名称で、マスコミによって広く報道された。

註66 詳細は「Wave」（2015年7月、新潟市美術館）を参照。サインのデザインについてのインタビューを掲載している。

註67 詳しくは、濱興治、藤原工「新潟市美術館の照明リノベーション（Ⅱ）」（『電設技術』2015年9月号、日本電設技術工業協会、2015年9月）を参照。照明実験のデータなど詳細に掲載、紹介されている。

註68 並木誠士、中川理『美術館の可能性』学芸出版社、2006年、26-28頁

註69 米盛、137頁

註70 『新潟市美術館設計競技記録集』82頁

違う。しかし、筆者自身が学芸員の立場から現在の美術館の建物を見つめたとき、作品の動線においては看過し難い弱点を抱えていることは事実であり、そのようなハードとしての欠点は建設時点でのバックヤードの完成像の曖昧さに起因しているのではないかと、とも考えてしまう。具体例を挙げれば、一般市民への貸室である市民ギャラリーへの作品搬入動線は、収蔵庫の前を通過している。日頃より安全対策をしてはいるものの、収蔵作品の搬出入動線や防犯面でのリスクがここに存在している。他に、収蔵品を展示室に搬出入する経路が、企画展示室と常設展示室の間のロビーにおいて来館者の観覧動線と重なり合ってしまう。そのため、開館時の展示・撤収作業の際は注意を払わなければならない。同じ搬出入動線にはスロープがある。来館者エリアでは建築的な見どころとなっているランプと同様、立地の高低差を解消するための傾斜路がバックヤードにもあるためであるが、作品を台車で運ぶ際などは特に気を遣う。また、同じく前川建築の特徴であるタイル床も、作品の運搬時には、振動を与える要因となるため床の養生をした上で作業しなければならない。いずれの問題に対しても運用のレベルで工夫をしてはいるものの、美術作品の取扱いを考慮すると望ましくはない。先に、エントランスから展示室にかけては、比較的、当初の案の通りに設計されていることを述べたが、来館者以外の施設の使用者の観点が計画の中で十分に反映されなかったことの裏返しでもあるのかもしれない。

しかし、本稿の目的は、当館の建設経緯を批判的に捉え、具体的な道筋なきままに歩み始めた出発点をあげつらうことや、「ハコモノ」建築であることを嘆くことにあるのではない。むしろ、過去30年の軌跡を振り返ることで確認したいのは、改修工事というかたちで継続的かつ定期的に手を加えてきたという積み重ねの意義である。第一に、少しずつではあるが、各工事期の最新の技術や知識を導入したり、社会的要請に見合うよう軌道修正を行うことができたことが挙げられる。10年置きに予算を計上し改修を実施できたことは、筆者の経験上、他館の職員や関係者から驚かれることが少なくない。開館から30~40年を経過して初めて、かなり大規模な工事に踏み切るといふ例も耳にする〔註71〕。その場合、推測にはなるが、一度に必要な資金や労力、その間の技術の進展や度合いの変化を考慮すると、こま目に、かつ分散してメンテナンスを行う方が、建物と息の長い付き合い方をしていくことが可能だと思われる。

第二に挙げたいのが、工事に関わる担当者のレベルで、知識や経験が継承されやすかったのではないかと、という点である。ここでの担当者とは、第一義に美術館の職員を意味している。そこには、学芸員だけでなく、事務・管理部門の職員も含まれる。というのも、学芸員は比較的長い時間を同じ職場で過ごすことになりやすい職であるが、公立館の場合、事務系の職員は数年置きに異動する場合がほとんどである。時間が経てば経つ程前回の工事について体験的に知る職員は少なくなる。また、多額の費用と時間を要する工事に、学芸員と事務系職員との協力も不可欠である。当館の場合、定期的に改修を実施することで、過去の工事の経緯に通じながら次回の工事を見通す人材や人間関係が育ちやすかったのではないかとと言える。

その他の「担当者」として、設計事務所もまた、工事をする上では欠かすことのできない存在であり、この中でノウハウが引き継がれることも重要である。新潟市美術館の場合、改修工事の度に当初の設計を担当した前川建築設計事務所と協議を重ね、工事監理など実際の契約を通じて施設の改善に関わってきてもらった点が特徴的だと言えるだろう。前川國男自身、生前、主要な建築作品については竣工の後も維持管理に努めたとされている。建設業者、技術者、設計者等と毎年予定を決めて集まり、現場で建物を見ながら、老朽化などの技術的な問題を議論するようしていたという〔註72〕。また、前川建築設計事務所自体、国内で有数の、公立の文化施設設計の実績を持つ設計者である。新築だけでなく、その後のメンテナンスに携わってきた豊富な経験が、当館の建物の維持に与えているであろう利点も忘れてはならないだろう。

公立館において同一の業者と契約を結び、継続的に関係性を築くことは、公共事業の透明性を目的に入札制度が一般的になった今日においては難しい。だが、最初の企画から開館後のフォローまでが、同じ業者によって一貫して行われることがいかに有益であるかは、例えば私立館の改修事例によって示されている〔註73〕。改修毎に異なる設計コンサルタントに依頼をすれば、それだけでイニシャルコストが増大するという声も聞こえてくる。設計時点から建物についてよく知る立場の人々と連携することの意義を明確に、例えば数値のようなかたちで示し、現行の制度の中で認めていくことは易しくはない。また、短いスパンで定期的に工事を

註71 主に増改築と開館からの経過年数の関係について、全国的な調査を実施し論じている先行例に、野村東太、太田宏「博物館の面積構成とその経年変化に関する研究」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会、1987年8月、385-386頁）、小林宣文「文化財公開施設の収蔵環境に関するアンケート調査」結果報告」（『Museum Data』75号、丹青研究所、2009年11月、7-24頁）などがある。

註72 横野彦「前川國男と現在」、『生誕100年・前川國男建築展』、248-249頁

註73 菅野元衛「博物館建築の建替え・増改修プロジェクトのあり方を考える」、『博物館研究』第49巻第2号、公益財団法人日本博物館協会、2014年2月、14-17頁

うための予算を、継続的かつ十分に確保していくことは、昨今の行政を巡る財政事情を俯瞰しても困難である。

当館の30年間の経験を振り返るとき、当初は「住人」たる職員不在のまま「ハコモノ」として建設された施設であっても、それによって発生した不具合を乗り越えながら使い続けてきたことがわかる。その積み重ねの中には、当館が建物について抱えてきた問題が他の多くの美術館・博物館とも共通していることから〔註74〕、施設の使い方についての何かしらのヒントがあるように思えるのである。近年、当館と同一の建設背景を持つ、1970～90年代開館の美術館・博物館の多くが、施設の老朽化を課題としていたり、実際に改修に踏み切る例を頻繁に見かけるようになった。当館の30年間のあゆみを自画自賛するつもりはなく、また、他館でも種々の工夫がなされていることと思う。これまでに下した様々な判断や選択した方法が、未来にどのような影響をもたらすのかは不透明であり、時間のみがその答えを示し得ると考えているが、本稿で記した個別具体の事例が、何か他所で参考になることがあるとすれば幸いである。

なお、執筆に際し、資料の提供や掲載について、前川建築設計事務所ならびに上山寛氏の多大な強力を得ました。末筆ながら謝意を表明します。

(ほしの・りつこ 新潟市美術館 学芸員)

註74 野村東太ほか「博物館職員からみた各部空間の建築的問題点の考察：博物館に関する建築計画的研究Ⅳ」、『日本建築学会計画系論文報告集』第429号、日本建築学会、1991年11月、93-103頁

参考文献

- 岡田民雄『イタリア軒物語』新潟日報事業社、1974年
- 前川國男「建築とインテリアを担当して四半世紀」、『株式会社紀伊屋書店創業五十年記念誌』紀伊屋書店、1977年
- 前川國男・MID同人「前川國男のディテール 熊本県立美術館をとらえて」彰国社、1979年
- 前川國男、宮内嘉久「一建築家の信條」晶文社、1981年
- 新潟市建設局建築部営繕課、新潟市教育委員会社会教育課編『新潟市美術館設計競技記録集』新潟市、1983年
- 『昭和59年度 新潟市の社会教育』新潟市教育委員会、1984年
- 「わが建築青春記」、『建築雑誌』第99号、日本建築学会、1984年3月
- 前川國男著、前川國男建築設計事務所企画、宮内嘉久編集事務所・前川國男建築設計事務所編『前川國男＝コスモスと方法』前川國男建築設計事務所、1985年
- 米盛和孝「ニュース〈建築〉新潟市美術館」、『日経アーキテクチャ』第253号、日経マゴロウヒル社、1985年12月
- 建築思潮研究所編『建築設計資料13 美術館』建築資料研究社、1986年
- 世田谷美術館編『日本の美術館建築展図録』世田谷美術館、1987年
- 野村東太、太田宏「博物館の面積構成とその経年変化に関する研究」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』1987年10月号、一般社団法人日本建築学会、1987年8月
- 宮内嘉久編『前川國男作品集—建築の方法』美術出版社、1990年
- 野村東太、朴光範、平野暁臣、藤田祐三「博物館職員からみた各部空間の建築的問題点の考察：博物館に関する建築計画的研究Ⅳ」、『日本建築学会計画系論文報告集』第429号、一般社団法人日本建築学会、1991年11月
- 前川建築設計事務所「新潟市美術館常設展示室増築工事設計説明書」
- 前川貫一著、藤井肇男註・翻刻「川の人物誌（4）前川貫一—私の河川道中記」、にほんのかわ編集委員会編『にほんのかわ』第94号、日本河川開発調査会、2001年8月
- 『生誕100年・前川國男建築展』生誕100年・前川國男建築展実行委員会、2005年
- 前川國男設計事務所OB会有志著、建築思潮研究所編『建築ライブラリー17 前川國男・弟子たちは語る』建築資料研究者、2006年
- 松隈洋編『前川國男 現代との対話』六耀社、2006年
- 並木誠士、中川理『美術館の可能性』学芸出版社、2006年
- 濱興治、藤原工、中矢清司「新潟市美術館の照明リノベーション」、『電設技術』2006年7月号、社団法人日本電設工業協会、2006年7月
- 松沢寿重「土木家・前川貫一と建築家・前川國男 父から子へ—受け継がれた志」、五百川清編『大津分水双書資料編 第七巻 大津分水と信濃川下流域の土地改良』社団法人北陸建設弘済会、2007年5月
- 小林宣文「『文化財公開施設の収蔵環境に関するアンケート調査』結果報告」、『Museum Data』75号、丹青研究所、2009年11月
- 酒井忠康監修、読売新聞社・美術館連絡協議会編集協力『美術館と建築』青幻舎、2013年
- 菅野元衛「博物館建築の建替え・増改修プロジェクトのあり方を考える」、『博物館研究』第49巻第2号、公益財団法人日本博物館協会、2014年2月
- 「BCS賞受賞作品探訪記27 第27回受賞作品（1986年）新潟市美術館 前編」、一般社団法人日本建設業連合会広報委員会『Ace建設業界』2015年2月号、一般社団法人日本建設業連合会、2015年2月
- 「BCS賞受賞作品探訪記27 第27回受賞作品（1986年）新潟市美術館 後編」、一般社団法人日本建設業連合会広報委員会『Ace建設業界』2015年3月号、一般社団法人日本建設業連合会、2015年3月
- 『Wave』新潟市美術館、2015年7月
- 星野立子編著『前川國男：新潟から新潟へ』新潟市美術館、2015年7月
- 濱興治、藤原工「新潟市美術館の照明リノベーション（Ⅱ）」、『電設技術』2015年9月号、日本電設技術工業協会、2015年9月

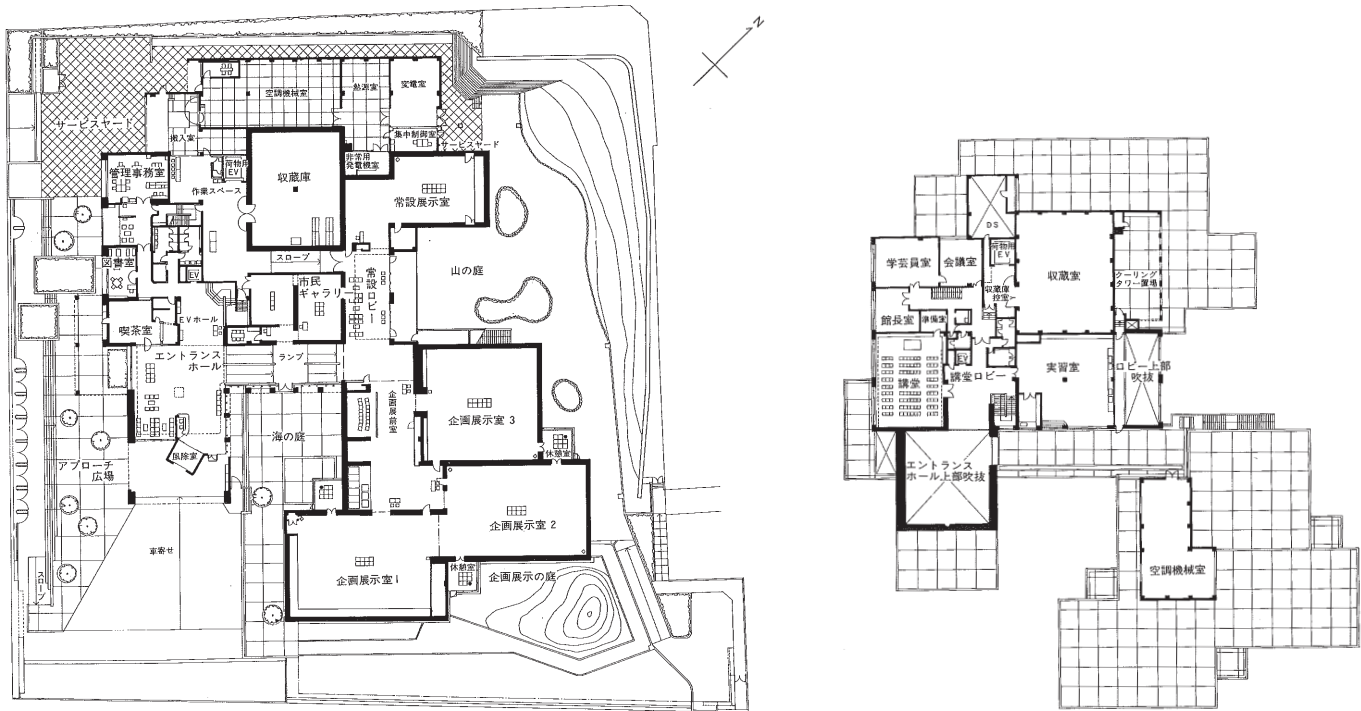


図1 新潟市美術館平面図 (1階〔左〕・2階〔右〕) 1985年時点

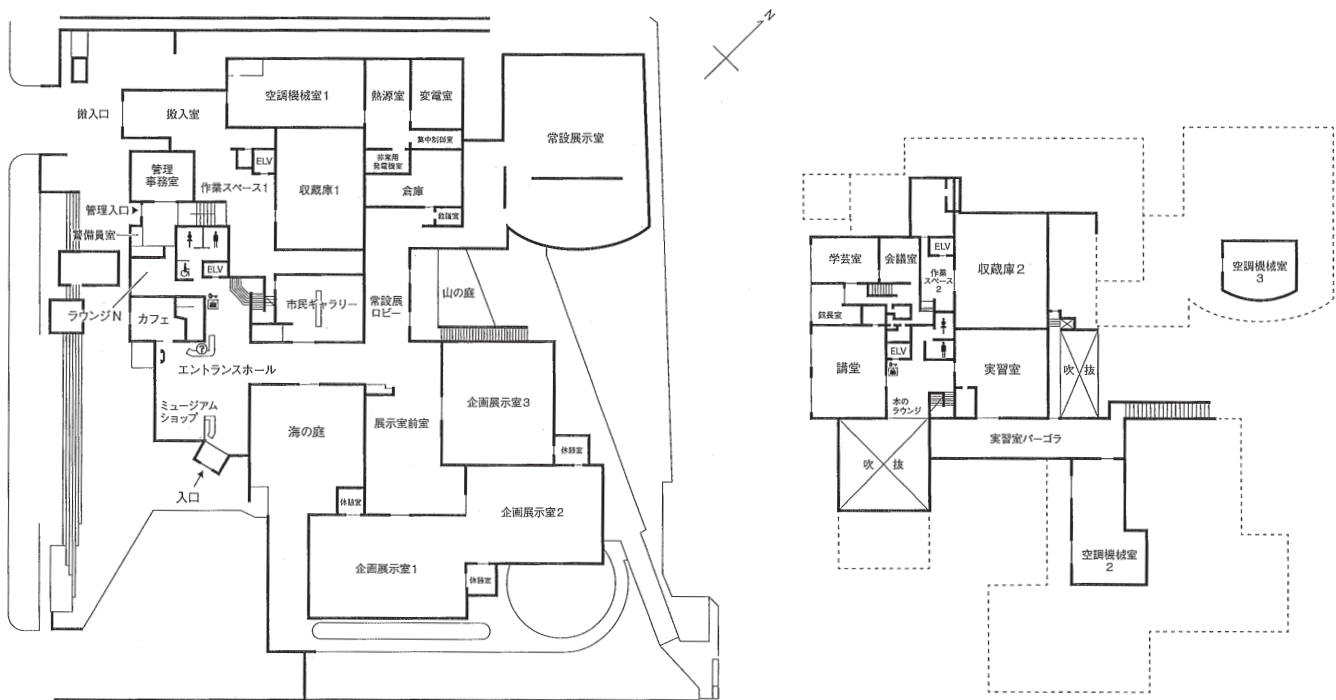


図2 新潟市美術館平面図 (1階〔左〕・2階〔右〕) 2015年時点

表1 新潟市美術館建設期の全国の公立美術館・博物館設置状況（1970～1985）

* 開館時点の名称により、年別に五十音順に表記した。

* 現在の名称と異なる場合は、後継の組織名称を（ ）に記した。

1970（昭和45）年	愛媛県立美術館（現愛媛県美術館） 和歌山県立近代美術館	兵庫県立近代美術館（現兵庫県立美術館）	
1971（昭和46）年	桑名市立文化美術館（現桑名市博物館） 浜松市美術館	埼玉県立博物館（現埼玉県立歴史と民俗の博物館）	
1972（昭和47）年	網走市立美術館 鳥取県立博物館	栃木県立美術館	
1973（昭和48）年	瀬戸内海歴史民俗資料館	奈良県立美術館	
1974（昭和49）年	北九州市立美術館 千葉県立美術館	群馬県立近代美術館	
1975（昭和50）年	東京都美術館		
1976（昭和51）年	熊本県立美術館		
1977（昭和52）年	大分県立芸術会館（現大分県立美術館） 東京国立近代美術館工芸館	国立国際美術館 福井県立美術館	国立民族学博物館 北海道立近代美術館
1978（昭和53）年	山梨県立美術館		
1979（昭和54）年	板橋区立美術館 豊橋市美術博物館	岡山市立オリエント美術館 福岡市美術館	国立西洋美術館新館 山口県立美術館
1980（昭和55）年	尾道市立美術館		
1981（昭和56）年	静岡市立芹沢銈介美術館 宮城県美術館	渋谷区立松濤美術館 都城市立美術館	富山県立近代美術館
1982（昭和57）年	大阪市立東洋陶磁美術館 埼玉県立近代美術館	岐阜県美術館 北海道立旭川美術館	呉市立美術館 三重県立美術館
1983（昭和58）年	石川県立美術館 佐賀県立美術館 東京都庭園美術館 米子市美術館	刈谷市美術館 佐野市郷土博物館 土門拳記念館	倉敷市立展示美術館（現倉敷市立美術館） 下関市立美術館 姫路市立美術館
1984（昭和59）年	いわき市立美術館 釧路市立博物館 西脇市岡之山美術館 葛鉄五郎記念美術館	神奈川県立近代美術館別館（現同鎌倉別館） 滋賀県立近代美術館 福島県立美術館	東京国立博物館資料館 別府市美術館
1985（昭和60）年	鹿兒島市立美術館 新潟市美術館	おかざき世界子ども美術博物館 練馬区立美術館	坂出市民美術館 福岡県立美術館

参考資料

世田谷美術館編『日本の美術館建築展図録』世田谷美術館、1987年

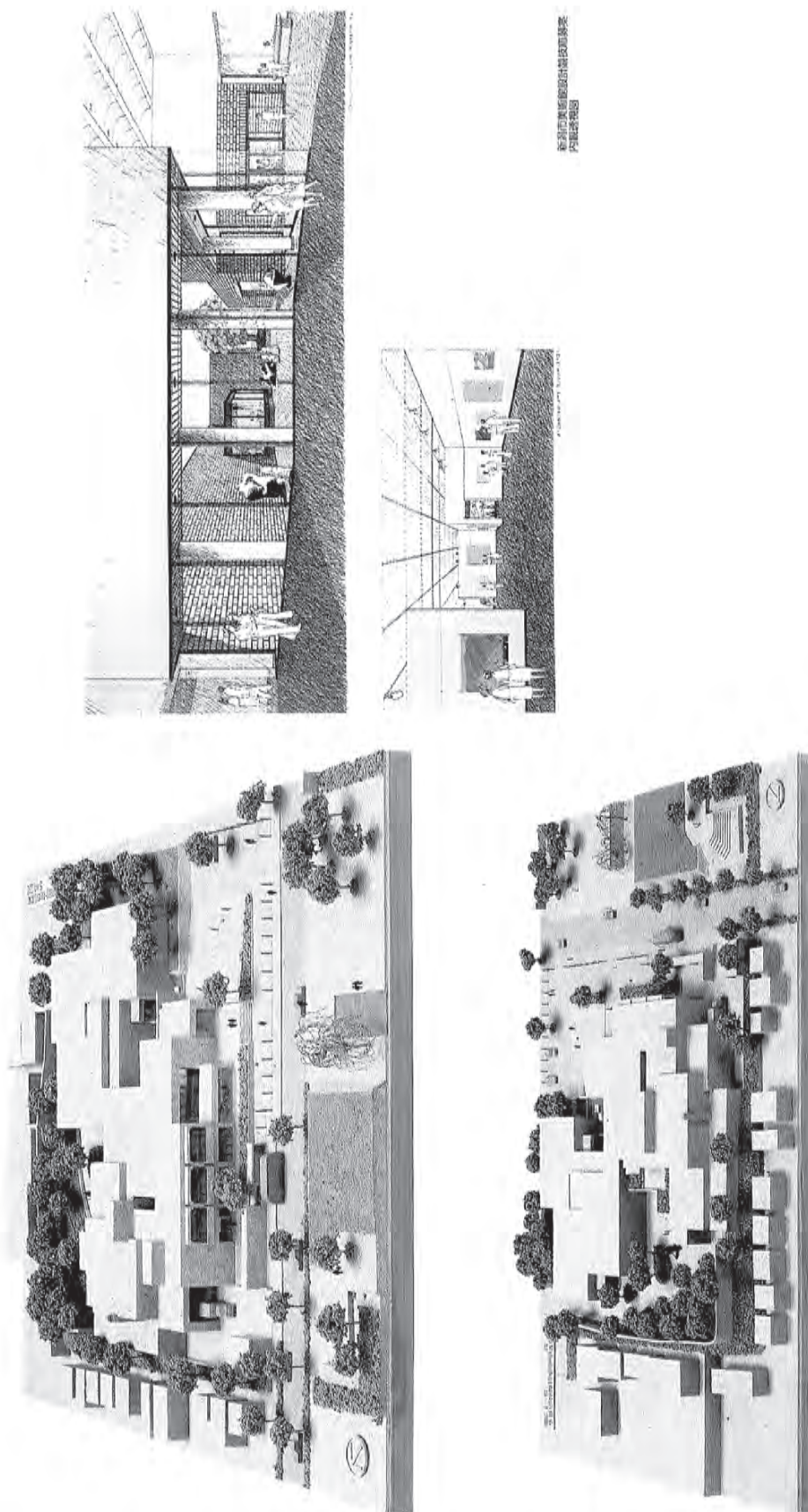
「美術館建築年表」、酒井忠康監修、読売新聞社・美術館連絡協議会編集協力『美術館と建築』青幻舎、2013年、128-161頁

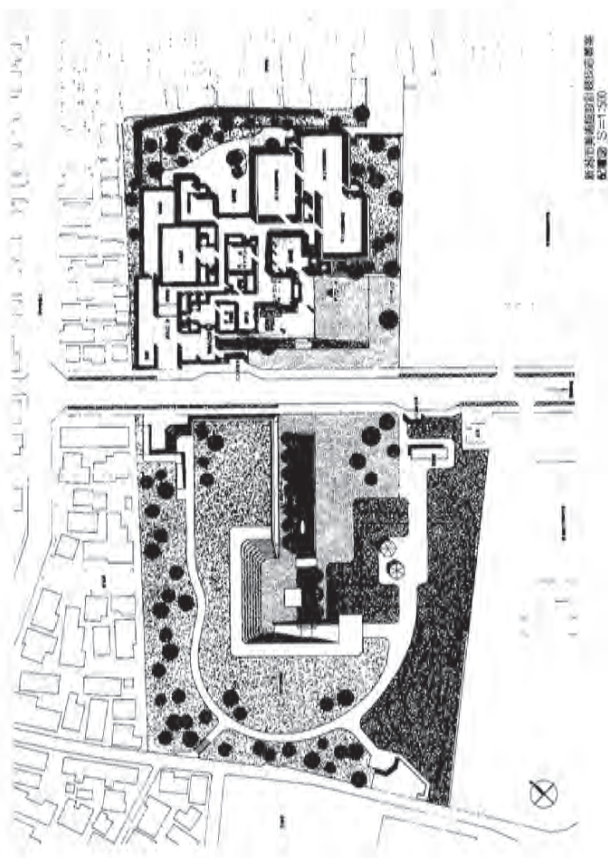
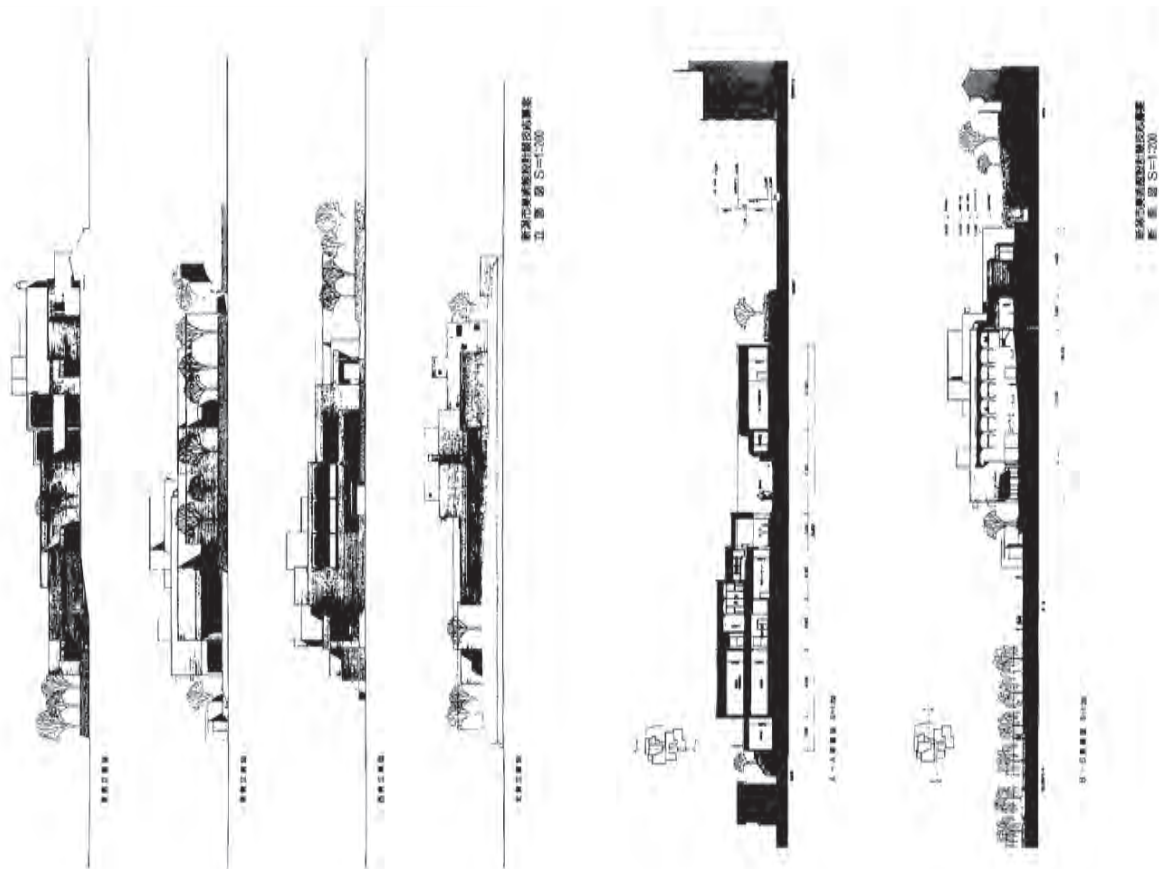
表2 新潟市美術館関連年表

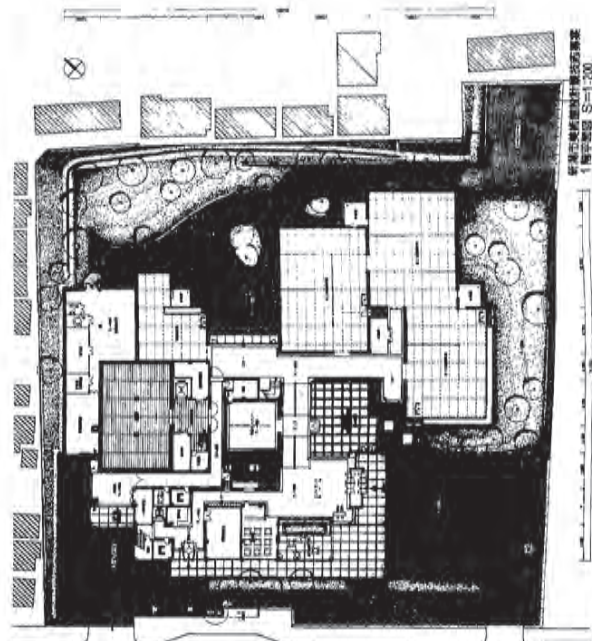
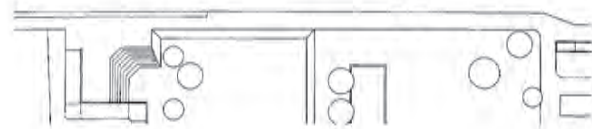
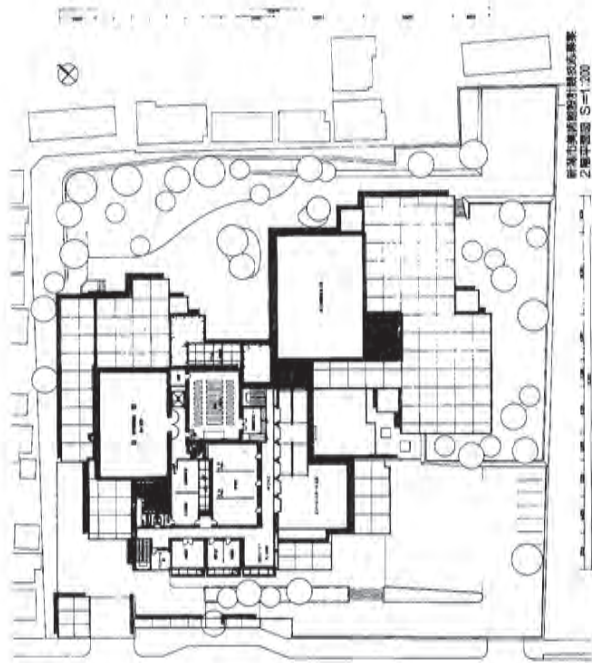
1978 (昭和53) 年	9月	美術館建設期成同盟会市立美術館の建設について市長に陳情
1980 (昭和55) 年	4月	美術館建設計画検討委員会設置 (美術関係有識者8人で構成)
1981 (昭和56) 年	2月	2月議会臨時会で建設用地取得について議決
	3月	建設用地取得 (面積9,725.19m ²)
1982 (昭和57) 年	3月	基本計画発表
	6月	美術館設計競技実施 (指名競技方式 6社指名 審査員7人)
	9月	設計事務所決定 (株式会社前川國男建築設計事務所)、基本実施設計委託契約
1983 (昭和58) 年	3月	基本実施設計完了
	7月	美術館本体工事着工
	10月	「美術館開設準備会議」「美術資料選定会議」を設置 (準備会議委員12人、選定会議委員6人)
1984 (昭和59) 年	2月	教育委員会事務局社会教育課に「美術館開設準備室」を設置
	8月	外構工事竣工
	12月	本体工事竣工
1985 (昭和60) 年	3月	外構工事竣工、美術館条例制定
	4月	教育委員会教育機関として美術館設置、林紀一郎館長就任
	10月	開館 (13日)
1986 (昭和61) 年	3月	博物館登録
1992 (平成4) 年	6月	常設展示室増築工事着工
1994 (平成6) 年	3月	常設展示室増築工事竣工
1995 (平成7) 年	4月	斉藤修館長就任
1999 (平成11) 年	3月	所管の変更のため博物館登録廃止
	4月	総務局国際文化部文化振興課の所管となる
2000 (平成12) 年	3月	博物館相当施設指定
2004 (平成16) 年	4月	久保尋二館長就任
	12月	美術館施設改修工事着工
2005 (平成17) 年	3月	美術館施設改修工事竣工
2006 (平成18) 年	4月	大科俊夫館長就任
2007 (平成19) 年	4月	組織改正により文化スポーツ部文化政策課の所管となる
		北川フラム館長就任
2009 (平成21) 年	3月	篠田昭館長就任
	4月	組織改正により所管部の名称が文化観光・スポーツ部となる
2010 (平成22) 年	4月	「新潟市美術館の評価及び改革に関する委員会」設置
	6月	高橋建造館長就任
2011 (平成23) 年	10月	塩田純一館長就任
	11月	美術館ロゴデザイン公募実施 (プロポーザル方式)
2012 (平成24) 年	3月	美術館ロゴ、シンボルマーク制定 (デザイン 服部一成氏)
2014 (平成26) 年	4月	組織改正により所管部の名称が文化スポーツ部となる
	10月	美術館大規模改修工事着工
2015 (平成27) 年	3月	美術館大規模改修工事竣工

資料 株式会社前川國男建築設計事務所案（制作：1982）

（出典：新潟市建設局建設部宮繕課、新潟市教育委員会社会教育課編『新潟市美術館設計競技記録集』新潟市、1983年）







設計説明書

① はじめに

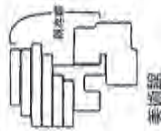
- 文化を養える施設創りの根拠

●美術は運命に対する防衛である

一と言われている。日々の生活の喜びや新鮮な感動が運命に押し流されていくことへの最後の防衛として、あるいはより広義の文化を養い上げる精神の砦としての美術を「みる・聴く・語る」ための美術館が必要とされる。そして本邦文化と言うものは壟所に根ざす、いわば国土と隣り合った概念として語られるべきものであった。ある場所が新たな建築や環境を獲得して活動をはじめ、それが風雪に耐えて生き残っていく、その有り様をもって初めて施設は真に文化を養えることができるのである。今、新潟市美術館こそ歴史の道に在って、そこにしかなく、それにふさわしい風格を持たねばならない。

② 性格づけ

- 基本計画



A. 敷地

- 風土性や環境も含めた敷地の有り様を逆らわずむしろそれを最大限に活かす、

一つまの敷地条件に無理に逆らう建築は決して自然の在り様とはならない、これが本案の基本的な出発点である。地下を掘らず、既存コンクリート構造物に手をつけずに工員節減やその有効利用、工期短縮や施工安全性への寄与、さらに近隣への配慮等へつながらる。更に方位や風向を配慮した平面、既存レベルを極力生かす高低計画、平面交差による公園との一体化、既存緑を庭園彫景として利用するなどを考慮。



B. 機能

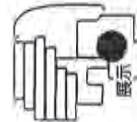
- 展示機能を中心に部分の独立性と全体の調和をはかる

一ことを主眼に利用者が内外空間を一体として感じられるよう配慮。教育普及、搬出入と収納、管理等の各部門も極力集中させ機能のまとまりを重視し、相互を十分な広さを持った回廊で明快に連繫させます。

C. 構造

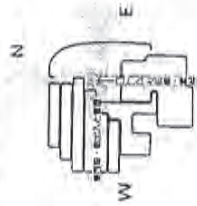
- 個々の空間スケールに合わせた構造要素を適切に配置

一してそれらを統合するのに相応しい構造形式を選択、荷重や応力の過度の集中や偏在を排し充分な安全性と許容できる限りの軽質性を考慮。例えば展示フロアの展示空間は周囲のリブ付壁と上に架けられた1枚の平板屋根で構成。基礎は桁形式とし地震時の梁状の恐れのない地盤に支持。

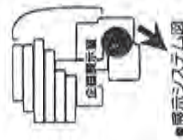


③ 空間づくり

- 配置計画と空間構成



南北軸・展示と玄関アプローチ
東西軸・搬出入と管理



A. 配置計画

- 方位と風向、人とモノの流れ、既存緑の利用と公園との一体化から出発

一して南北軸に玄関、ロビーと展示棟、東西軸にサービス、収納と搬出入、管理部門を配しそれぞれに奥庭から前庭、車寄せを経て公園へと連繫する屋外空間を有機的に結ぶ。

B. 平面構成

- 明快なゾーニング、利用と管理のしやすさ、2つの屋外展示場

一を主眼に構成。企画展示は1-3室へと様々な展示形態に対応でき、荷受と同一レベルで内法3m以上の回廊によって連絡。玄関は南面させ管理・搬出入口は風をさけて配置、北西面は開口極小。

C. 面積配分

- 展示部門49%、収納部門13%、研究教育普及約10%という展示・収納を主体とする理想的な面積配分。(面積表参照。展示部門は玄関ホール・ロビーを含む。)

D. 階層利用

- 地階を設けず、1階は美術館とギャラリー、2階が美術センター

一として機能、収蔵庫は将来2階に渡り(躯体は先行する)調査研究部門とも結ぶ。1階はすべて斜路によっておりエレベーター使用と併せて身体の不自由な方もすべてのゾーンが利用可能。

E. 動線計画

- 豊かな視覚体験の変化と到達経路の明快さを同時に満足
- 一させ、搬出入及び開館時の活動はすべて管理部門を bypass させず。2階/リロニーは玄関ホールの雰囲気を変えながらこの部門の単独使用を可能とする。

F. 展示システム

- 可動間仕切りによってあらゆる展示形態に対応一することが可能。(展示システム図参照)

④ 各室まわり ◆玄関ホール・ロビー・海の庭・山の庭---

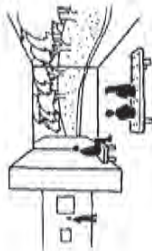
玄関前の約100㎡の軒下空間が悪天候に備える。展示と休息は、内外空間を一体として使え、奥庭は順光で鑑賞できる。



■ 玄関アプローチには十分な庇が

◆常設・企画展示室---

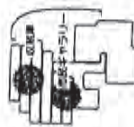
常設100㎡、企画350㎡以上の壁面長可能。多様な表現形態に対応でき、特に企画3は5m以上の天井高を持ちスタジオとしても使用可。それぞれ出入口の容易さ、自然光の体験コーナー、500kg/㎡の床荷重に耐える等の特色を持つ。



■ 展示室には自然採光の体験コーナーが

◆ギャラリー---

玄関に近く管理と結んで搬入も容易。

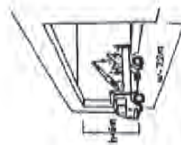


◆収蔵庫と増築について---

1階は六面が外気から隔絶され温度湿度制御に理想的。2階（将来計画）は逐次内装することによって紙張、研究部門、常設展示とも連繫。

◆搬出入、荷解室まわり---

通路からのアクセスの容易さ、充分な開口と高さ（7m x 6m）と季節風を避ける配置。



■ 搬出入口は十分な高さで広さが

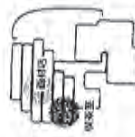


◆講堂・実習室・吹抜と玄関ホール---

2階にあって吹抜を介して1階の雰囲気。また講堂からは山の庭が鑑賞できる。開館時の単独使用も可能。実習室は融雪装置のある光庭を持つ。

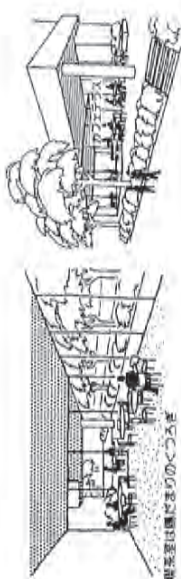


■ ホール、ロビーを隔めても1階のコーナーからその雰囲気は十分に



◆喫茶兼軽食堂・画材店---

南向き編だまりと外部公園等からの単独利用が可能。売店は実習室の動線上。



■ 喫茶室は編だまりのつらま

◆管理関係諸室---

管理上の要所に配し原則として自然採光。

⑤ 雰囲気づくり

◆内外主要仕上の説明

A. 形態概念

◆コーナーの光と影-----

建築術は凝固した音楽である。



◆屋根の重なり-----

唯一の豊穡な方法は反復によること。

5

B. 外装計画

- 文化を奏でる施設にふさわしく、誕生した日から風雪に耐えていく材料

C. 内装計画

- 展示作品以上にモノを言ってはならないという原則
- 一と屋内外に異和感がなく平凡な材料で非凡な結果を生むよう配慮。(仕上表別図参照)

6 設備について

- 空調・換気・機械排煙
- 特殊消火

●熱源はガス焚き2重効用吸収式冷温水機

- 一を用い単一ダクト方式を採用。(空調系統、換気及機械排煙、特異消化を要する部屋別図参照。)

7 光りと明かり

- 採光と照明計画

- 安らぎはひがりで、展示はあかりをコントロールして一行う。特に居室は可能な限り自然採光。(展示室の照明計画別表参照。)

8 省エネについて

- 省エネルギー対策

●外断熱の屋根と2重サッシ、内断熱の壁と、全熱交換装置

- 一を新鮮空気取入口に設け、各展示室系統空調機レタンドラクト内に設けガス量検出装置を取付け展示室用空調設備の排気量を制御。

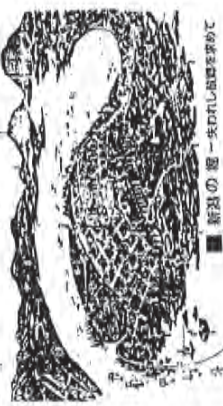
9 道路と公園 A. 公園計画

- 屋外計画



- 失われし故郷を求めて
- 一堀割りと柳のモール

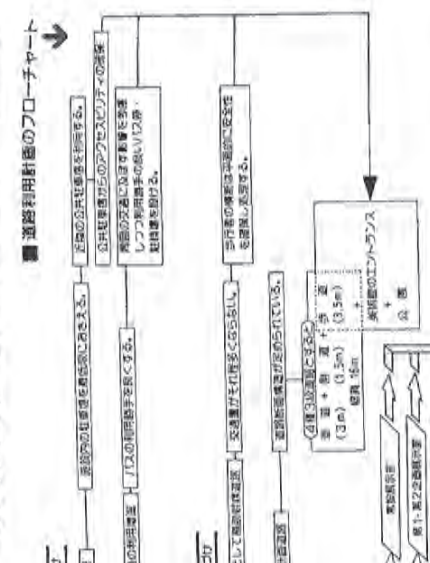
一公園は昔日の新潟を見出すことの出発点。堀割、柳と堀割、日本海と砂丘や松林—そんなイメージの文脈が詩を越えた安らぎを生む。勿論各種のイベントや展示も可能。美術館と一体となつて、場所と結びつた文化の起点となる。



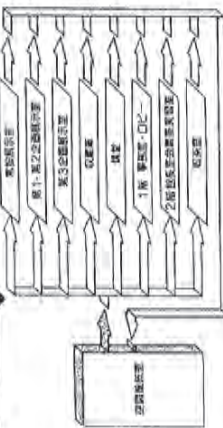
●新緑の郷—失われし故郷を求めて

B. 道路利用計画

- 公共交通の利用を増進し、歩行者の横断は平面で処理一して同時に公共駐車場からのアクセスビリアーを確保する。



空調系統図



換気系統図



展示室照明計画一覧

展示室	照明の種類	照明の位置
エントランスホール	天井照明	天井照明
ロビー	天井照明	天井照明
第1-第2会議室	天井照明	天井照明
収蔵庫	天井照明	天井照明
図書	天井照明	天井照明
1階 事務室・ロビー	天井照明	天井照明
2階 展示室・会議室	天井照明	天井照明
収蔵庫	天井照明	天井照明

排煙系統図



特殊消火設備系統図



10 面積表

A. 面積表

敷地面積㎡	A	9725.19 m ²
各階床面積㎡	1F	3730 m ²
	2F	330 m ²
延床面積	B	4360 m ²
建築面積㎡	C	3530 m ²
	B/A	44.83%
	C/A	36.30%
外構工事	延床面積	45
	建築面積	30
	延床面積	15
	建築面積	10

■ 仕上表

A. 外部仕上表

部位	仕様
屋上設備	アスファルト・外断熱材×軽スコンシート・鋼板フラットング
外壁	アスファルト・外断熱材×中層鋼板タイレ板・一部樹脂
窓の底 (窓外断熱断熱構造)	樹脂製タイレボード×断熱材・コンクリート打設断熱構造・内断熱
窓の頂 (窓外断熱断熱構造)	樹脂製タイレ板
外周床	花崗石100mm厚×断熱材・花崗石×砂
建具	樹脂製アルミ・樹脂製断熱材・花崗石×砂 木製建具・樹脂製断熱材・花崗石×砂 樹脂製建具・樹脂製断熱材・花崗石×砂 樹脂製建具・樹脂製断熱材・花崗石×砂

B. 内部仕上表

室名	床	かべ	天井
エントランスホール	樹脂製タイレ 500mm厚断熱材×ベット	樹脂製タイレボード×断熱材 RC打設断熱構造 RC打設断熱構造	RC打設断熱構造 断熱材×石膏ボード
展示室	プラスチック 500mm厚断熱材×ベット	プラスチック 断熱材×石膏ボード	石膏ボード 断熱材×石膏ボード
市民ギャラリー	500mm厚断熱材×ベット	断熱材×石膏ボード	断熱材×石膏ボード
収容庫	本造床×フローリング 樹脂製断熱材×ベット	断熱材×石膏ボード	樹脂製断熱材×石膏ボード
講堂	プラスチック 500mm厚断熱材×ベット	断熱材×石膏ボード	断熱材×石膏ボード
実習室	プラスチック 500mm厚断熱材×ベット	断熱材×石膏ボード	断熱材×石膏ボード
喫茶室	500mm厚断熱材×ベット	断熱材×石膏ボード	断熱材×石膏ボード

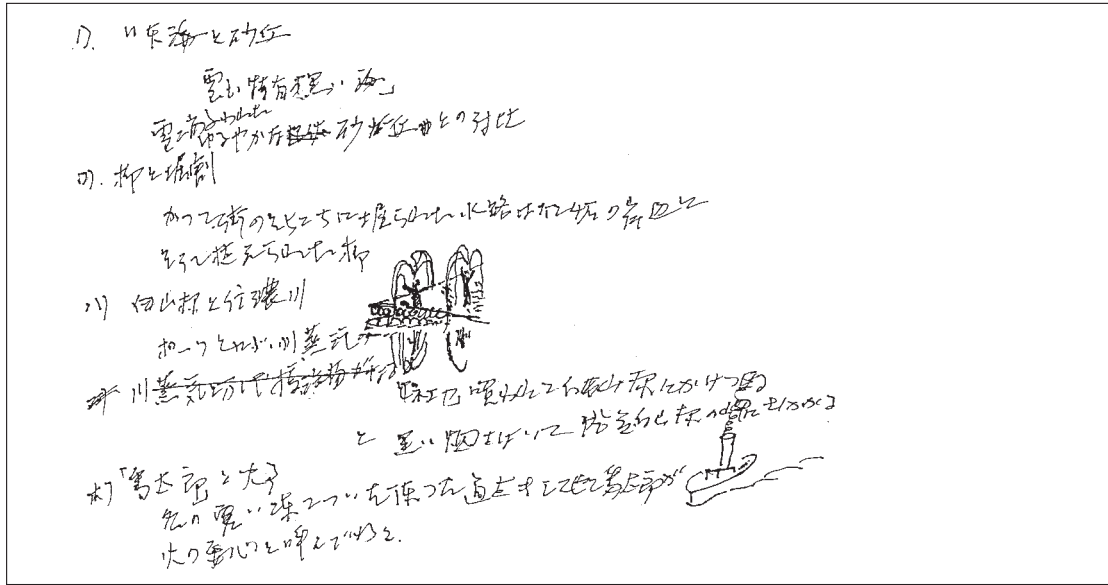
● 内外主要仕上の説明

■ 仕上表

B. 部門別面積表

部門別	室名	積算面積㎡	部門別割合	備註
展示部門	市民ギャラリー	215		
	市民ギャラリー	1305		
	市民ギャラリー	110		
	市民ギャラリー	26		
	エントランスホール	250		
	ロビー	210		
	受付室	31	● 270	
	山の麓	2400	● 2400	
	収容庫	2147	● 2147	49.0%
	小計	310	● 310	
収容部門	収容庫	45		
	収容庫	13		
	収容庫	25		
	収容庫	60		
	収容庫	34		
	収容庫	28		
	収容庫	36		
	収容庫	521	● 521	12.6%
	小計	352		
	研究・教育普及部門	市民ギャラリー	35	
市民ギャラリー		45		
市民ギャラリー		150		
市民ギャラリー		126		
市民ギャラリー		417	● 417	9.5%
小計		68		
市民ギャラリー		15		
市民ギャラリー		22		
市民ギャラリー		105	● 105	2.4%
小計		20		
サービス部門	市民ギャラリー	20		
	市民ギャラリー	74		
	市民ギャラリー	40		
	市民ギャラリー	14		
	市民ギャラリー	14		
	市民ギャラリー	20	● 20	5.0%
	小計	216		
	市民ギャラリー	274	● 274	
	市民ギャラリー	66		
	小計	584		
その他	市民ギャラリー	924	● 924	21.5%
	市民ギャラリー	584		
	市民ギャラリー	216		
延床面積	● 合計	4360 m ²	100%	

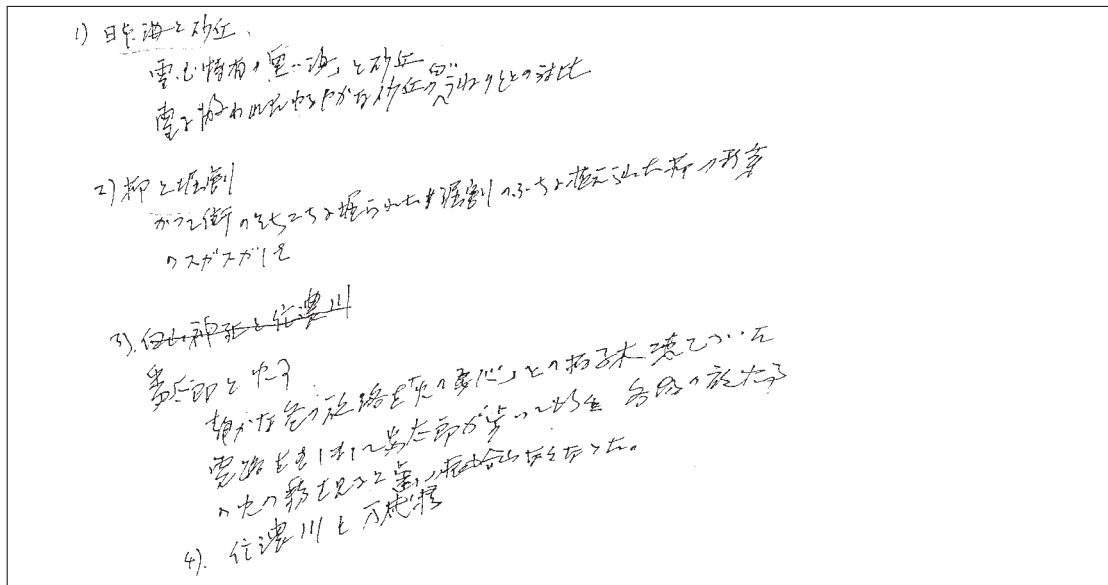
前川國男自筆スケッチより (資料提供: すべて前川建築設計事務所)



- イ) 日本海と砂丘
雪国特有の「黒い海」
雪二□われた
ゆるやかな日砂丘との対比
- ロ) 柳と堀割
かつて街のあちこちに掘られた水路は□□□石の岸辺に
そうて植えられた柳
- ハ) 白山様と信濃川
ボートにふい川蒸気の (絵)
柳と堀割 (中)
- ニ) 川蒸気と万代橋□日になる
「ネエヤ」に負われて白山様にかけつける
と黒い煙をはいて沿□白山様の□にさしかかる 煙を吐く川蒸気 (下)
- ホ) 「番太郎」と火事
冬の寒い凍てついた凍った道をさしませて番太郎が
火の要「ママ」心呼んで□る

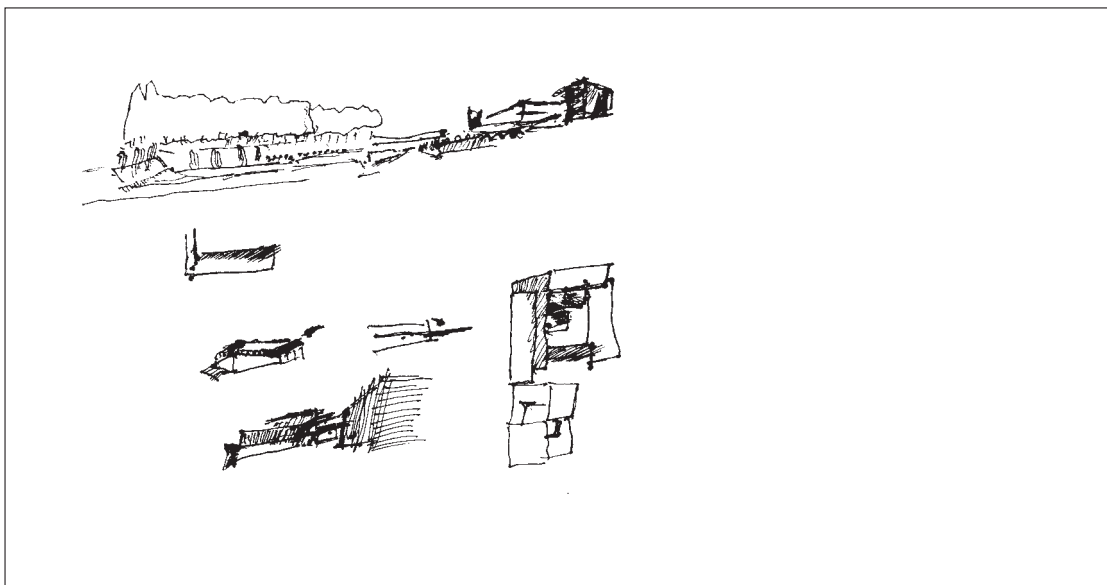
図A 1979年

※「前川國男=コスモスと方法」135頁にも掲載



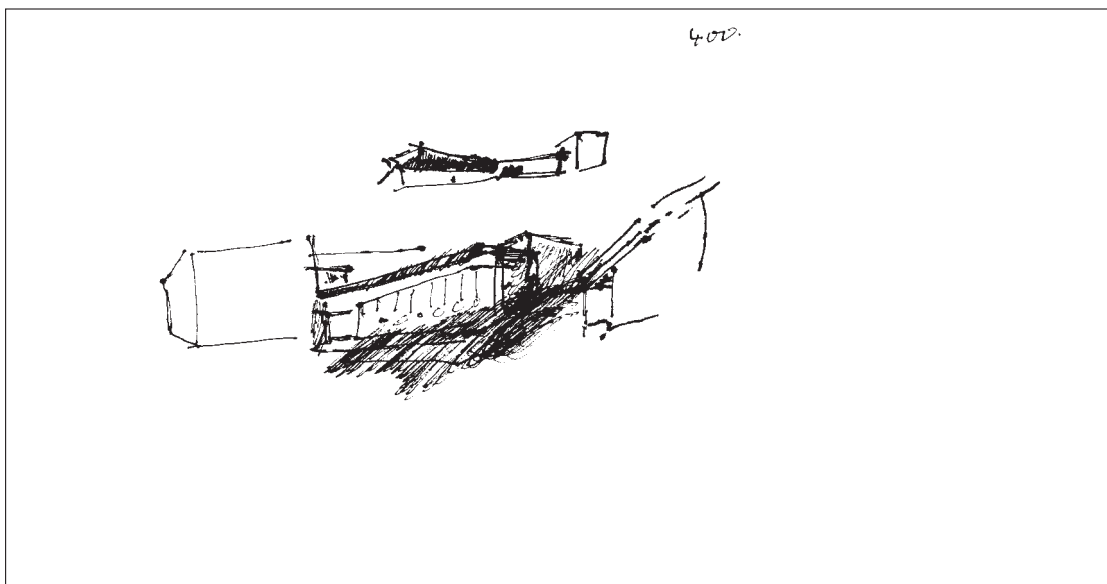
- 1) 日本海と砂丘
雪国特有の「黒い海」と砂丘
白い
雪二□われたゆるやかな砂丘のへうねりと「ママ」の対比
- 2) 柳と堀割
かつて街のあちこちに掘られた日堀割のふち二植えられた柳の新芽
のフスフスガしさ
- 3) 白山神社と信濃川
番太郎と火事
静かな冬の夜路を「火の要「ママ」心」との拍子木凍てついた
雪路をさしませて番太郎が歩いて□日 台風の夜火事
の火の粉を見ると歯ノ振□合わなくなった。
- 4) 信濃川と万代橋

図B 1979年頃か



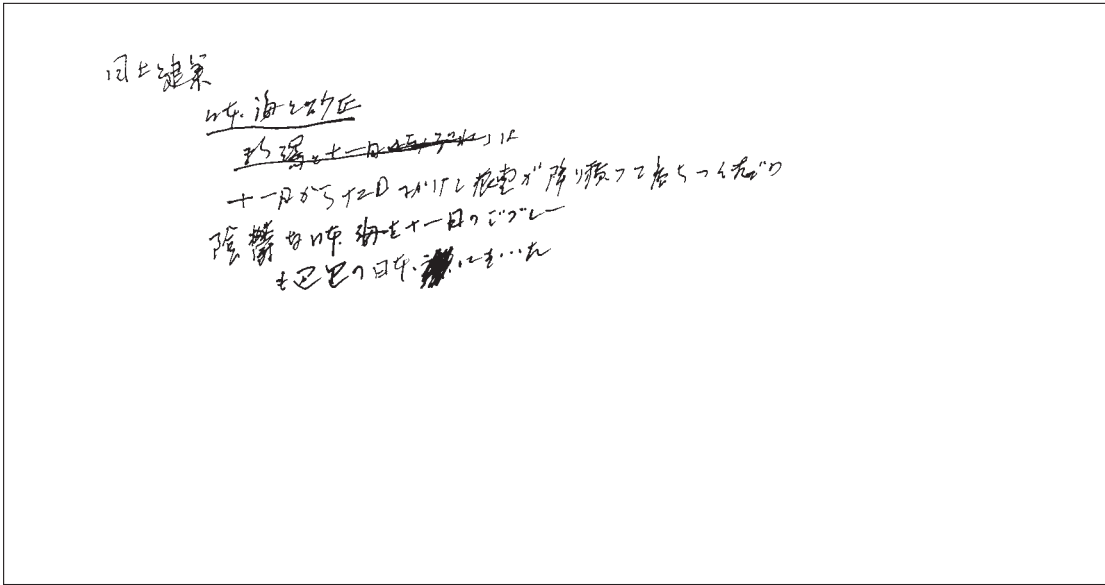
(絵)
西大畑公園・新潟市美術館遠景(上)
新潟市美術館外観か(左下)
新潟市美術館平面か(右下)

図C 1982~84年頃

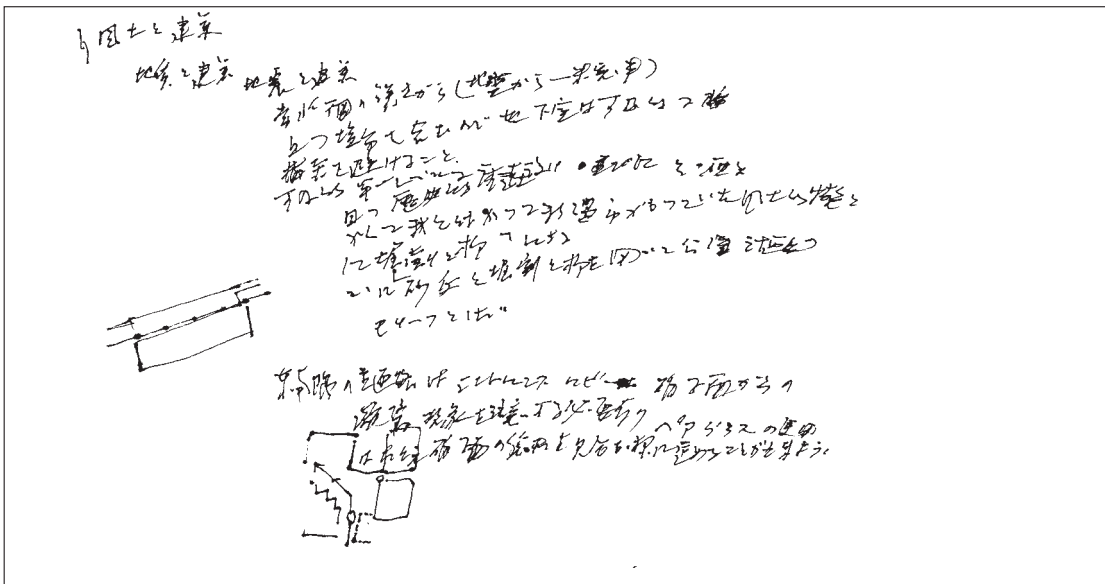


(絵)
新潟市美術館外観か

図D



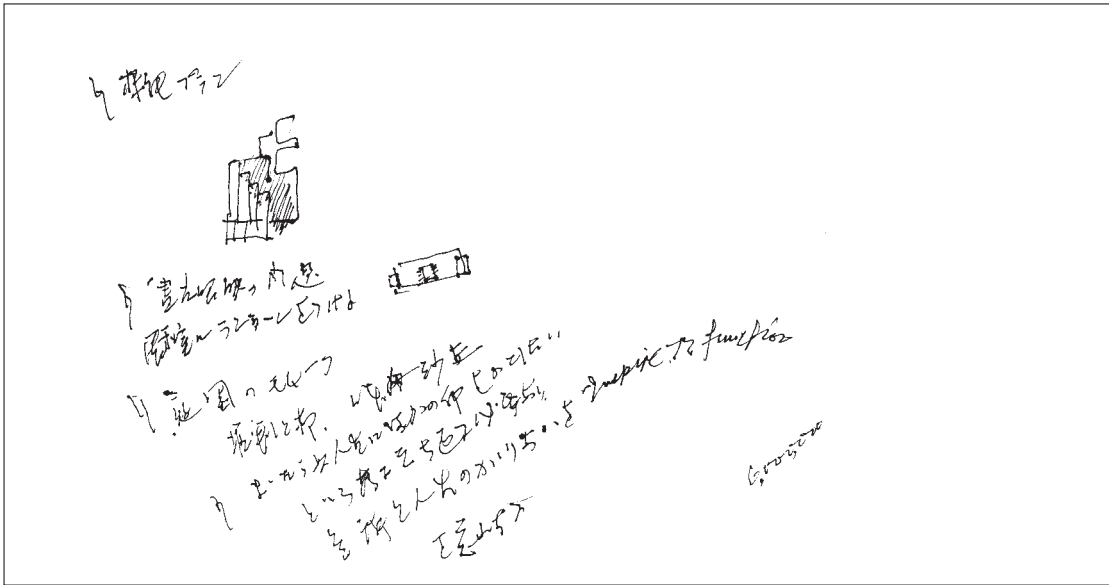
風土と建築 図E
 日本海と砂丘
 新潟と十一月日「みぞれ」は
 十一月から十二月にかけて根雪が降り積って落ち着くまでの
 陰鬱な日本海を十一月の□□□□
 も巴里の日本日に□いた



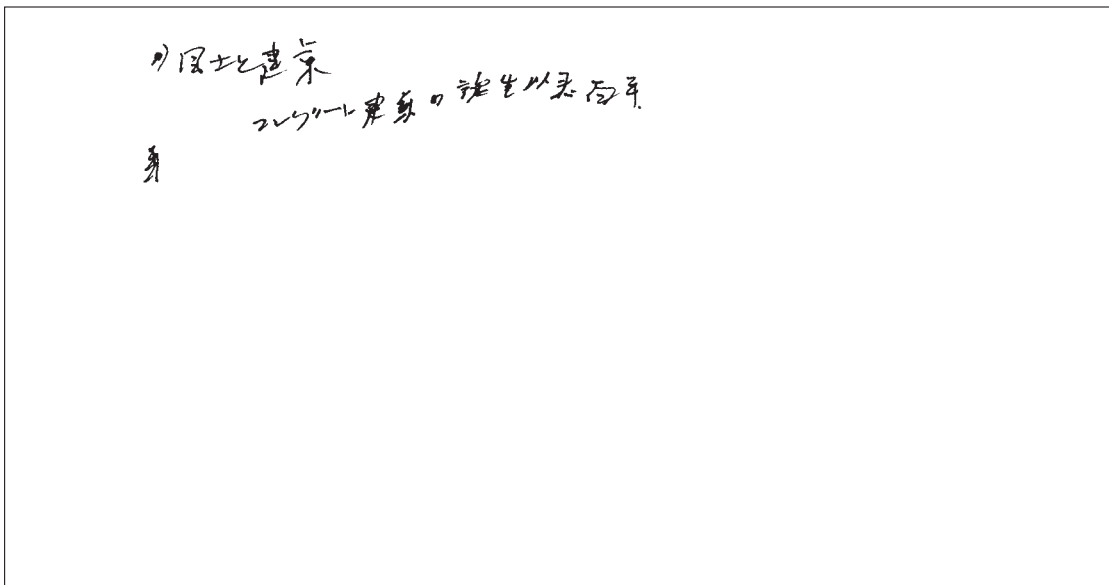
風土と建築 図F
 地質と建築
 地震と建築
 常水□の□さから (地盤から一米□□)
 且つ塩分を含むので地下室は可及的ニ避
 樹木を避けること
 可及的事□□□□
 且つ歴史的□□の□びた□の歴史
 かくて我々はかつて新潟市がもつていた風土的特色と
 して「掘割と柳」による
 こゝに砂丘と掘割と柳を用いて公園計画との
 モチーフとしたい
 □□□の主□□はエントランスロビーは 硝子面からの
 凝縮現象を注意する必要有り ペアガラスの使用
 は□と□硝子面の□□を見合ふ様に進めることが出来る。

*以降、同一スケッチブック上の連続するページに記載されている。

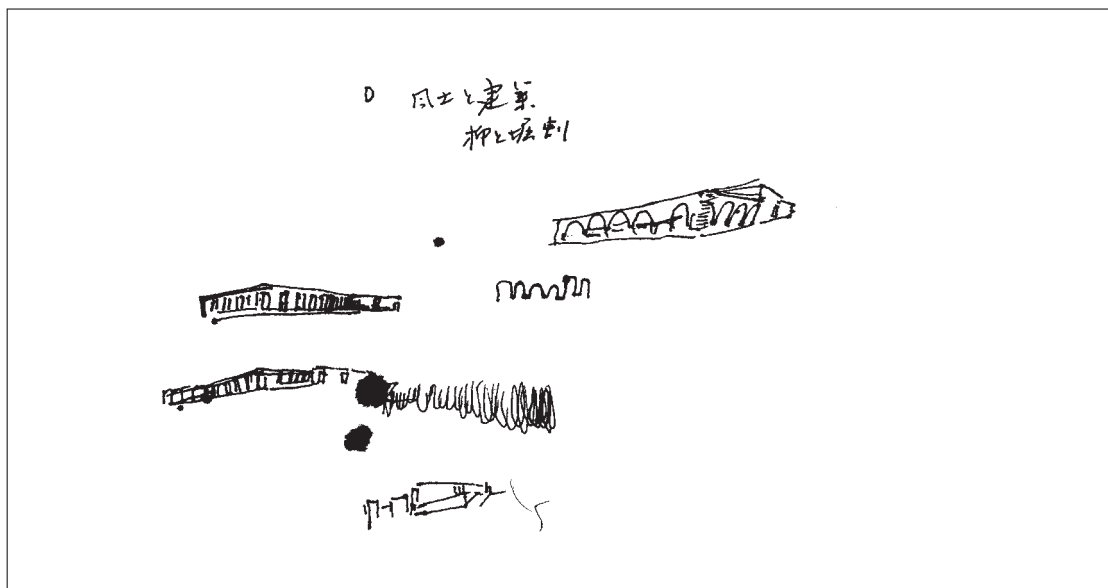
(絵)
 不明 (中)
 動線の検討か (下)



図G
 S 様□プラン
 (絵) 1階平面概略図
 S 室□□□の問題
 展示室にランタンをつける (絵) 「ランタン」のある外観
 S 庭園のモチーフ
 掘割と柳 日本海 砂丘
 S □□□人生に□□かの□□□の□□□の□□□
 という考二立ち直る必要あり
 芸術と人口のかゝりあいを□u□psic□ function
 を忘れず□ 6,000,000



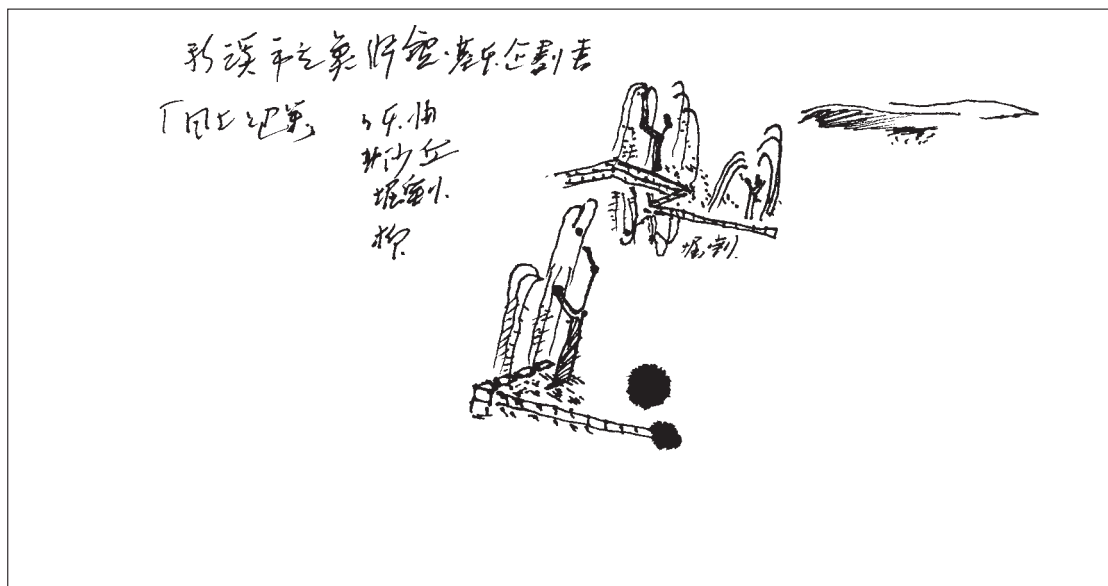
図H
 □) 風土と建築
 コンクリート建築の誕生以来百年
 □



0 風土と建築
柳と堀割

図 I

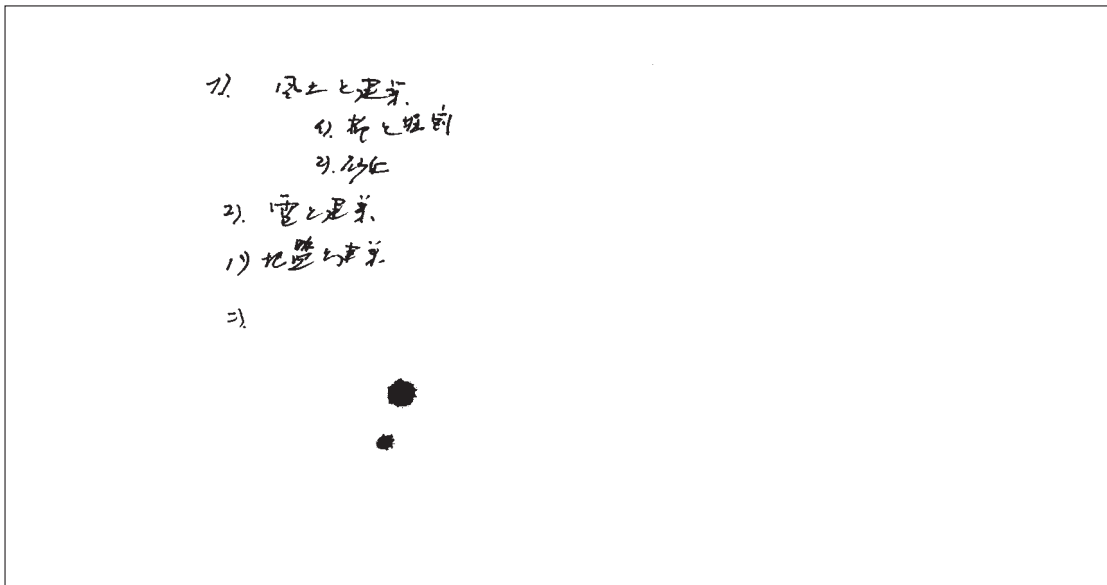
(絵)
いずれも外観か



新潟市立美術館基本企劃書

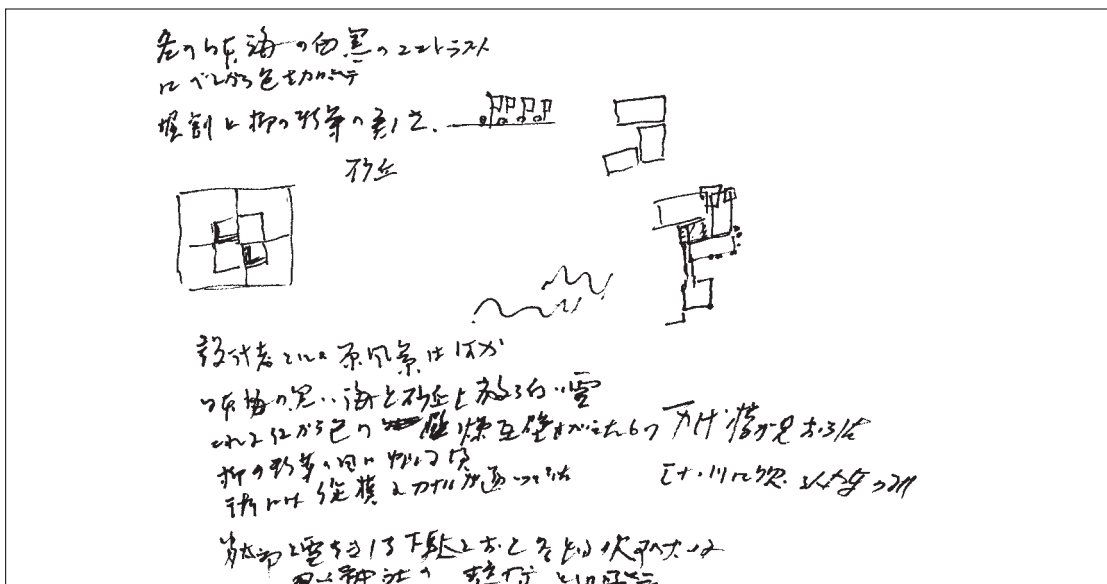
図 J

「風土と建築」 日本海 (絵)
 白砂丘 遠くの山並か砂丘か (上)
 堀割 堀割 柳と堀割 (中・下)
 柳



- 1) 風土と建築
- イ) 柳と掘割
- ロ) 砂丘
- 2) 雪と建築
- ハ) 地盤と建築
- ニ)

図K

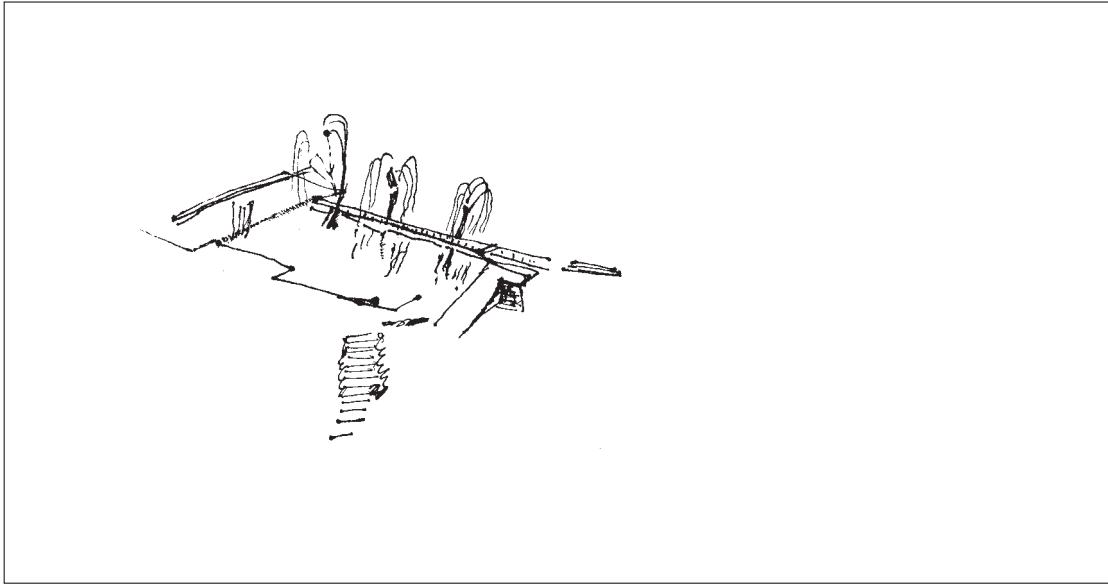


- 冬の日本海の白黒のコントラスト
- にべんがら色を加へて
- 掘割と柳の新芽の美しさ
- 砂丘

図L

(絵)
不明 (左上)
ほかはプランの検討か

設計者としての原風景は何か
日本海の黒い海と砂丘を□□白い雪
これは□から□の白壁 煉瓦壁をかえたもの 万代橋が見おろした
柳の新芽の風にゆられる頃
街には縦横二カナルが通っていた しナノ川に映る人力車の列
番太郎と雪を走る下駄をおと各□□す□火□□
白山神社の 堤防と川蒸気



(絵) 柳と堀割の復元案か

図M

新潟市美術館・新潟市新津美術館研究紀要 第4号 (平成27年度)

Bulletin of Niigata City Art Museum & Niitsu Art Museum No.4

発行日 / 2016年3月25日

編集・発行 / 新潟市美術館

〒951-8556 新潟市中央区西大畑町5191-9

TEL:025-223-1622

FAX:025-228-3051

印刷 / 株式会社タカヨシ

ISSN 2187-6770